

陣ノ内城跡

- 総括報告書 -

2020

甲佐町教育委員会

発行者：甲佐町教育委員会
所 属：社会教育課
発行年度：令和2年度

陣ノ内城跡

- 総括報告書 -



2020
甲佐町教育委員会



巻頭図版1 陣ノ内城跡から甲佐町を望む



陣ノ内城跡から甲佐町を望む



陣ノ内城跡から甲佐岳を望む



陣ノ内城跡と麓集落

序 文

甲佐町指定文化財「陣ノ内館跡」は、昭和55年2月に甲佐町の文化財に初めて指定されました。これは、当時から「陣ノ内館跡」が町民の方々からも注目を集める遺跡であったことを物語っています。その理由としては、幅15m以上、総延長400mを超える堀や、高さ5m、総延長200m以上にわたる土塁といった遺構が現在も良好に残っていることがあげられます。

その後、陣ノ内館跡では平成14年の測量調査の実施以来、令和元年までの長期間にわたって発掘調査や文献調査といった様々な調査を実施してきました。その結果、現在私たちが目にする「陣ノ内館跡」はこれまでの定説であった「阿蘇大宮司の館跡」ではなく、「豊臣大名小西行長の支城」であったことが明らかになってきました。

そこで、この度遺跡の名称を「陣ノ内館跡」から「陣ノ内城跡」へあらため、その城郭としての歴史的価値を検証する総括報告書を作成しました。

本報告書中では陣ノ内城跡が小西の城郭の遺構を良好に残す遺跡であり、豊臣大名が新たな領国を統治する際のモデルの一つとして有力な事例であることを明らかにすることができました。また、陣ノ内城の地は中世から近世前半まで常に甲佐を統治する権力などによって利用され続けてきたことも明らかにすることができました。

今後はこれらの調査成果をもとに、陣ノ内城跡が甲佐町の重要な歴史的遺産として未永く保存され、皆様の文化財に対する知識と保護意識高揚の場所となり、まちづくりや学校教育、生涯学習など多方面にわたっても活用されれば幸いと存じます。

最後になりましたが、これまでの多くの調査等に際しご協力いただきました地元下豊内区の皆さんを始め、文化庁及び熊本県教育委員会、さらに陣ノ内館跡調査専門委員会、甲佐町文化財保護委員会の各位など、関係者皆様に心より厚く御礼申し上げます。

令和2年12月25日

甲佐町教育長 蔵田 勇治

例 言

- 1 本書は、甲佐町指定文化財「陣ノ内館跡」（熊本県上益城郡甲佐町大字豊内字陣ノ内）について平成14年から令和元年度にかけて実施した発掘調査、文献調査及び諸調査の成果をもとに県内で同時期の城郭と比較して、県内での位置づけや歴史的価値を検証した総括報告書である。
- 2 本書の刊行にあわせて遺跡の名称を「陣ノ内館跡」から「陣ノ内城跡」に変更する。その経緯については本書中「第1章1（2）遺跡の名称について」を参照いただきたい。
- 3 本書で用いる県内の城郭のうち、宇土城（宇土市）、麦島城（八代市）、愛藤寺城（上益城郡山都町）の3遺跡は、肥後国絵図（慶長国絵図）に記載されている名称である宇土城、八代城、矢部城と表記する。
- 4 本書では「裳衆（もしゅう）」と呼ばれる、益城郡東北部一帯に削掘する阿蘇惟豊の家臣の中小在地領主の連合体について記載している。この「裳（上からウカンムリ、口、衣と書く）」の字は存在しない文字であるが、戦国時代に相良氏家臣によって記載された『八代日記』に「裳衆」についての記事が登場するため、本書でも先行研究にならってそのままの文字を使用する。
- 5 本書の図面に記載される座標値は、世界測地系に基づく。
- 6 本書掲載の空中写真は、木村龍生氏（熊本県教育庁教育総務局文化課）による。
- 7 本書で使用した肥後国絵図（正保国絵図）は熊本大学永青文庫研究センターの承諾を得て掲載している。
- 8 本書に関わる図面・写真・遺物は、甲佐町教育委員会において収蔵・保管し、本書に係る全ての成果は甲佐町教育委員会に所属する。
- 9 本書の執筆及び報告書全体の編集は上高原聡が行った。

本文目次

第1章	はじめに	3
1	刊行に至る経緯	3
	(1) これまでの取り組み	
	(2) 遺跡の名称について	
2	刊行に向けた組織	4
3	近年の陣ノ内城跡の取組み	5
第2章	位置と環境	7
1	地理的環境	7
2	歴史的環境	7
3	陣ノ内城跡の現況	11
	(1) 地 形	
	(2) 遺跡の現状	
第3章	調査成果	13
1	発掘調査	13
2	出土遺物	16
3	登城道調査	18
4	地名の聞き取り調査	19
5	文 献	21
6	県内の城郭との縄張りの比較	21
7	小 結	23
第4章	総 括	24
1	陣ノ内城と豊臣大名	24
2	小西の城郭について	26
3	小西の城郭の様相	28
	(1) 宇土城 (2) 八代城 (3) 矢部城	
	(4) 隈庄城 (5) 赤井城 (6) 豊福城	
4	文献や絵図に認められる陣ノ内城	32
5	小西の支城体制と陣ノ内城の位置づけ	34
6	陣ノ内城跡の土地利用について	37
7	破城の対象とならなかった城郭	39
8	陣ノ内城跡の歴史的価値	40
	(1) 小西の城郭の遺構を良好に残す	
	(2) 豊臣大名が新たな領国を宛がわれた際の統治モデルの一つ	
	(3) 長期間にわたって統治権力やそれに準ずる権力によって利用されてきた	

挿 図 目 次

図1	熊本県の地勢と陣ノ内城跡図	7
図2	甲佐町遺跡地区	8
図3	陣ノ内城跡現況名称図	11
図4	陣ノ内城跡現況地形図	12
図5	陣ノ内城跡遺構全体図	13
図6	陣ノ内城跡調査成果図1	14
図7	陣ノ内城跡調査成果図2	15
図8	登城道図	18
図9	地名の間き取り調査図	20
図10	肥後国主要城郭の横堀断面図	22
図11	加藤一国統治期の城郭及び街道配置図	24
図12	加藤の城郭測量図及び縄張図1	25
図13	加藤の城郭測量図及び縄張図2	26
図14	小西の城郭配置図	27
図15	小西の城郭測量図及び縄張図	29
図16	正保・天保国絵図と陣ノ内城跡	33
図17	戦国期の拠点城郭及び小西の城郭	35
図18	小西の支城網	36
図19	袞衆の城郭縄張図及び分布図	38

表 目 次

表1	戦国期・小西・加藤の城郭の横堀比較表	23
表2	小西の城郭の構成要素一覧表	31
表3	小西の支城整備対応表	34
表4	小西の城郭の選地一覧表	34
表5	袞衆の城郭の規模一覧表	37

写 真 図 版

巻頭図版1 陣ノ内城跡から甲佐町を望む

巻頭図版2 空中撮影写真

写1 陣ノ内城跡周辺航空撮影 10

写2 陣ノ内城跡出土遺物 17

第1章 はじめに

1 刊行に至る経緯

(1) これまでの取り組み

甲佐町役場の東側に所在する「陣ノ内」の字名を残す丘陵地上に造られた「陣ノ内館跡」は、長さ400mに及ぶ空堀や土塁を備えた城跡である。

1970年代に行われた熊本県教育委員会による中世城郭の悉皆調査以後、陣ノ内館跡は現地に堀や土塁等の遺構を良好に残す中世期の阿蘇大宮司の館跡として注目され、昭和55年2月には甲佐町指定文化財に指定された。しかし、具体的な調査はほとんど行われることなく、その範囲や構造は不明のままであった。その後、遺跡の詳細及び歴史的意義を明らかにするために、平成14年～16年にかけて地形測量や確認調査を実施した。その結果、平成17年に陣ノ内館跡は阿蘇大宮司の館跡とする発掘調査報告書を刊行し、遺跡の重要性が初めて町内外に認められた。

しかし、阿蘇大宮司の館とする根拠である「拾集言語」や「古城考」、「肥後國誌」等の文献史料が江戸時代中頃に書かれている点や、陣ノ内館跡が肥後国内の中世期にはみられない直線的な塁線を持つ構造から陣ノ内館跡を中世城館とする考え方が疑問視された。そこで、陣ノ内館跡の範囲・構造を明らかにし、遺跡を将来にわたり適切な保存・管理・活用をはかることを目的として、平成20年度から発掘調査及び関連調査事業を実施し、平成26年度末には発掘調査報告書（以下、「26年度報告書」という）を刊行した。

26年度報告書では発掘調査によって明らかになった縄張りや出土遺物など諸調査の結果から、陣ノ内館跡は中世館跡ではなく縄張り系城郭であることを指摘した。しかし、26年度報告書は陣ノ内館跡の遺構の性格に関する分析・検討が主体となっており、類似遺跡との比較による相対化やそれを基にした遺跡の価値づけが不十分であった。

そのため、26年度報告書刊行後も遺跡の価値づけについて継続して調査を行う予定であったが、平成28年熊本地震によって甲佐町は大きく被災し、陣ノ内館跡も西側斜面に亀裂が生じたため、調査を一時中断せざるを得ない状況となった。その後、熊本地震で被災した近隣市町村に所在する同時期の城郭の復旧が進むなかで、陣ノ内館跡の直線的な堀や土塁といった特徴的な遺構群があらためて注目を集めた。甲佐町では陣ノ内館跡のさらなる価値づけのための調査を平成30年度より再開し、令和元年9月にはその成果を文化庁の「中世城館・近世城郭等の保存に関する検討会」で発表する場を頂いた。そして、その場で受けた指摘事項についてあらためて調査・検討し、陣ノ内館跡の県内での位置づけや歴史的価値を明確化することを目的に本報告書を刊行することとなった。

(2) 遺跡の名称について

これまで遺跡の名称は江戸時代に書かれた文献史料を根拠に「陣ノ内館跡」として町内外に周知してきた。しかし、平成20年度以降の発掘調査や登城道調査等の諸調査によって明らかになった遺跡像は、中世館跡ではなく縄張り系城郭であった。そのため、これまでの遺跡の名称と調査成果による遺跡の性格が乖離した状況が発生した。このままでは第三者に異なったイメージを発信する懸念が生じたため、県内外の同様の遺構が残る史跡を参考に地域の人々に呼称として定着し、これまでの研究史の中でも用いられた「陣ノ内」に遺跡の性格を表す「城跡」とをあわせて「陣ノ内城跡」として遺跡の名称をあらためることを令和元年7月の陣ノ内館跡調査専門委員会に諮り了承を得て、今後は「陣ノ内城跡」として周知していくこととした。よって、本報告書では以下「陣ノ内城跡」として記述を行う。

2 刊行に向けた組織

本報告書刊行に係る組織は、以下の通りである。

【平成27年度】(2015年度)

教育長 蔵田 勇治
社会教育課長 上田 悟
社会教育係長 仲原 琴美
社会教育係 中川 慎士

【平成28年度】(2016年度)

教育長 蔵田 勇治
社会教育課長 吉岡 英二
社会教育係長 仲原 琴美
社会教育係 中川 慎士

【平成29年度】(2017年度)

教育長 蔵田 勇治
社会教育課長 吉岡 英二
社会教育係長 仲原 琴美
社会教育係 上高原 聡

【平成30年度】(2018年度)

教育長 蔵田 勇治
社会教育課長 吉岡 英二
社会教育係長 仲原 琴美
社会教育係 上高原 聡

【平成31年度(令和元年度)】(2019年度)

教育長 蔵田 勇治
社会教育課長 吉岡 英二
社会教育係長 仲原 琴美
社会教育係 上高原 聡
古田 良子(臨時職員)

【令和2年度】(2020年度)

教育長 蔵田 勇治
社会教育課長 奥村 伸二
社会教育係長 田上 美紀
社会教育係 上高原 聡
古田 良子(会計年度任用職員 9月～)
松本 みどり(会計年度任用職員 10月～)

【碑ノ内館跡調査専門委員会】(令和元年度)

小野正敏(国立歴史民俗博物館 名誉教授)
稲葉継陽(熊本大学永青文庫研究センター長 教授)

【助言・指導】

文化庁文化財第二課 熊本県教育庁教育総務局文化課(以下、熊本県教育庁文化課)

【調査協力】

近江俊秀(文化庁文化財第二課)、村崎孝宏・長谷部善一・廣田静学・宮崎敬士・矢野裕介・池田朋生・坂井田端志郎・木村龍生・能登原孝道・木庭真由子・呑田哲也・稲葉貴子・唐木ひとみ・梁出直美・松永望宏(熊本県教育庁文化課)、西野元勝(鹿児島県立埋蔵文化財センター)、松本博幸・中山圭・宮崎俊輔(天草市教育委員会)、手柴有美子・岸田裕一(人吉市教育委員会)、宮本千恵子(玉東町教育委員会)、橋口剛士(嘉島町教育委員会)、森本星史(益城町教育委員会)、青木勝士(熊本県立大学)、清村一男(前甲佐町文化財保護委員長)、本田荘一(前甲佐町文化財保護委員)、鶴嶋俊彦(肥後考古学会)、中田裕樹、熊本県県史広域土木部災害復興第二課 熊本大学永青文庫研究センター、甲佐町文化財保護委員会(順不同、敬称略)

3 近年の陣ノ内城跡の取組み

26年度報告書刊行以降の陣ノ内城跡の調査・研究・活用に関する取組みは、以下のとおりである。

平成28年度

熊本地震の発生により、調査研究事業は中断することになった。なお、熊本地震により陣ノ内城跡西側の崖面に亀裂が発生し、町建設課によって応急工事が実施された。また、本復旧工事の施工方法については、熊本県県央広域土木部災害復興第二課と熊本県教育庁文化課、甲佐町教育委員会と協議を重ね、斜面下の住民の安心・安全と遺跡の保存と景観に配慮した工法が採用された。

平成29年度

熊本県文化財保護協会と共同主催で鶴嶋俊彦氏（熊本市経済観光局熊本城調査研究センター文化財保護主幹 当時）を講師に、「陣ノ内の実像」と題する講演を実施した。

平成30年度

陣ノ内館跡の調査研究事業を再開する。

熊本県教育庁文化課と共同主催でパネル展「復興が教えてくれる！地域の歴史」を開催し、陣ノ内城跡の急傾斜地崩壊対策工事の復旧状況とあわせて陣ノ内城跡の発掘調査の成果を展示した。開催期間にはギャラリートークを実施し、その中で清村一男氏（甲佐町文化財保護委員長 当時）や西野元勝氏（熊本県教育庁文化課 鹿児島県立埋蔵文化財センターより派遣 当時）などが陣ノ内城跡について講演を行った。

なお、熊本地震で亀裂が発生した西側斜面において、熊本県県央広域土木部災害復興第二課により下豊内災害関連緊急急傾斜地崩壊対策工事が実施され、同年度末に復旧を完了した。

平成31年度（令和元年度）

前年度に引き続き、陣ノ内館跡の調査研究事業を実施する。

県内の城郭と交通路の関係及び破城の状況を確認するために、熊本大学永青文庫研究センターの協力のもと、永青文庫で保管されている肥後国絵図（正保国絵図）の調査を実施する。

それまでの調査の結果報告と今後の価値づけについての指導・助言を得るために、5年ぶりに「陣ノ内館跡調査専門委員会」を開催し、委員から意見を聴取した（7・3月）。7月には「陣ノ内館跡」から「陣ノ内城跡」への遺跡名称の変更について委員会に諮り、了承を得た。さらに、文化庁の「中世城館・近世城郭等の保存に関する検討会」にて陣ノ内城跡の調査成果を報告した。委員会や検討会で得られた意見を基に、さらなる調査・検討をすすめた。

また、第19回新甲佐町史歴史研修会で稲葉継陽氏（熊本大学永青文庫調査研究センター長・陣ノ内館跡調査専門委員）を講師に、「戦国時代の甲佐と陣ノ内城跡」と題した町民向けの講演会を行った。

令和2年度

これまでの陣ノ内城跡の調査研究事業をまとめた総括報告書を作成し、刊行する。

第2章 位置と環境

1 地理的環境 (図1)

熊本県は九州の中央に位置し、福岡、大分、宮崎、鹿児島各県と接する等、古来より交通の要衝である。東部は阿蘇カルデラを有する阿蘇に代表される山々がそびえ、西部は熊本平野及び八代平野などが広がり、宇土半島の先には天草諸島が続く。主な一級河川は県北部の菊池川、県東部の白川、緑川、県南部の球磨川の4大河川が東西に貫流する。また、熊本県は熊本地方、阿蘇地方、天草・芦北地方、球磨地方の4つに大きく区分することができ、山地形気候から海洋性気候まで多様な自然環境下にある。

甲佐町は、熊本県のほぼ中央、熊本市の約20km南方にあり、一級河川の緑川の中流域に位置する。町の北部は御船町、南部を美里町、そして西部は熊本市と接している。町周辺の地形を見ると、険しい東側の山地と集落が集中する緑川沿いに広がる低地が対照的である。そして緑川の西側は台地状の地形をなす。山地で最も高いのは、甲佐岳で標高は753.2mを測り、緑川沿いの平坦な地域の標高は30m程度である。

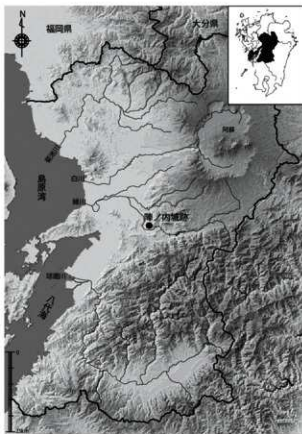


図1 熊本県の地勢と障ノ内城跡図

2 歴史的環境 (図2)

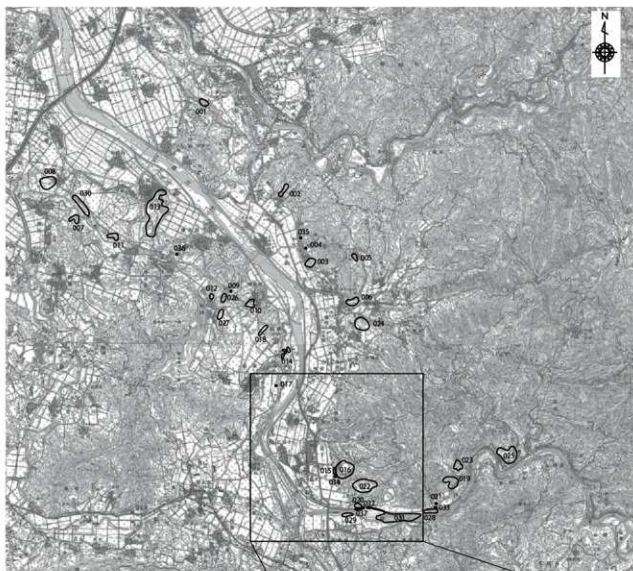
ここでは障ノ内城跡に関係すると考えられる中世～近世前期を中心に記載する。なお、原始・古代・近世～近代の項は26年度報告書を参照いただきたい。

中世における肥後国は、12世紀末の平安後期から始まる全国的に行われた律令制の解体に伴い、鎌倉期から南北朝期にかけて各地に私領や荘園を確認することができる。この時期の代表的な有力者には、菊池部の在庁官人出身で開発領主の菊池氏、古来より阿蘇郡に本拠をもつ阿蘇神社の大宮司職の阿蘇氏、宇土部の在地領主の宇土氏、八代庄地頭職の名和氏、遠江国から球磨部へ下向した相良氏等が分立していた。肥後国は中世から近世の時流に沿い、情勢も大きく揺れ動いていた。その中において甲佐は一貫して阿蘇氏の統治領域であった。

阿蘇氏は肥後国一宮、阿蘇神社の大宮司職の家である。大和朝廷氏姓制度下の国造、律令制下の郡司の伝統を負い、古代末から明白な系統を持ち、中世には武家として主に阿蘇・益城郡を統治した肥後国数々の有力者である。特に、矢部（現山都町）や阿蘇の山間部を領域とした阿蘇氏にとっては、山間部に連なり熊本平野への進出拠点となる甲佐の立地は重要であり、阿蘇氏の益城郡統治の拠点となっていた。

甲佐には統治に伴う宗教施設として甲佐社が建立された。甲佐社は郡部社（宇城市）・健軍社（熊本市）と共に原則的に阿蘇社の末社として位置づけられていたが、史料（康治2年（1143）2月阿蘇大宮司宇治惟宣解『大日本古文書 阿蘇文書之一』2号）からは少なくとも延保3年（1137）までには末社となっており、「当国第二宮」であったことが窺える。また、12世紀後半から14世紀中頃の史料には「当国第二宮靈験殊勝社壇也」（承安3年（1173）1月18日『大日本古文書 阿蘇文書之一』3号）や「我神者系阿蘇大明神御嫡子、南部管領之鎮守也」（正平16年（1361）『大日本古文書 阿蘇文書之二』阿蘇文書写二十九）等の記載がみられ、甲佐社は益城郡以南の一定の地域においては独自かつ最高の尊敬を集めていたことが窺える。

また、阿蘇氏の益城郡統治の拠点として、南北朝期の甲佐は一貫して南朝方阿蘇氏の拠点であり続けた。



番号	名称	類別	時代	所在地
001	中尾原	古墳地	古墳	白旗 中尾
002	北早川横穴群	古墳	古墳	白旗 北早川
003	早川横穴群	墳	中世	早川 下小塚
004	穴場寺跡	神社	中世	早川
005	木塚	古墳地	古墳	上早川
006	鶴取川	墳	中世	早川 塚下
007	中山寺下道横穴群	墳	古墳	中山 下道
008	注目瓦山	古墳地	縄文～中世	田原
009	俵の木さん古墳	古墳	古墳	御生原 俵の上
010	御生原	古墳地	縄文～弥生	御生原 俵の上
011	中山横穴群	古墳	古墳	中山
012	野井	古墳地	縄文～中世	山田
013	山口原原	古墳地	縄文	山口 原原
014	新津東前横穴群	古墳	古墳	新津 清野谷
015	下豊内横穴群	古墳	古墳	下豊内
016	堀ノ内横穴群	墳	中世	豊内 堀の内
017	熊澤古橋跡・熊澤跡	石造物	中世	新津 高上
018	六ヶ野	遺跡	古墳	新津 六ヶ野
019	御手池	古墳地	古代・中世	早川 清野原・清神社
020	堀川形本横穴群	古墳地	古代	豊内
021	家原石塚	石造物	中世	上郷
022	神谷城跡	城	中世	豊内 高谷川
023	安平城跡	城	中世	下郷 鹿野野
024	野野野	古墳地	古墳	下郷
025	小塚	古墳地	縄文・弥生	小塚
026	岩持・石塚	古墳地	古代	岩持 石塚
027	岩持・高先	古墳地	古代	岩持 高先
028	上郷任邊	石造物	中世	上郷 高上
029	石塚	遺跡	古墳	豊内 高谷川
030	中山原	集落	古墳・古代	中山 原川
031	堀ノ内遺跡	建造物	中世	豊内
032	堀の堀門	建造物	中世	豊内
033	堀川上道橋跡	歴史資料	中世	上郷
034	下豊内の岩持跡	歴史資料	中世	豊内
035	堀ノ内の古橋跡	歴史資料	中世	早川
036	津志田の岩持跡	歴史資料	中世	津志田
037	豊内堤防	石造	近世	豊内

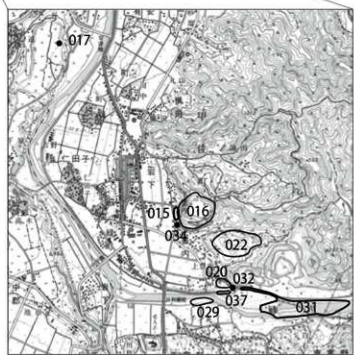


図2 甲佐町遺跡地図

南北朝初期には大宮司惟時が甲佐を本拠として益城郡を統治し、阿蘇・益城における北朝方勢力を一掃した。『肥後國誌』では「・・阿蘇大宮司惟時ノ館迹ニテ・・」と記されており、最晩年の阿蘇惟時は甲佐に居を定めたとの指摘もある（阿蘇品2005）。

大宮司惟時の女婿である恵良惟澄も甲佐地域及び益城郡を根拠として活動し続けた。征西府に提出した軍忠状（正平3年（1348）9月恵良惟澄軍忠状『大日本古文書 阿蘇文書之一』122号）によれば、15年間で35回にわたる合戦の功を連ねる。ほどなく南朝の勢力は菊池氏と八代の名和氏以外はほとんど零落するが、惟澄は甲佐嶽を拠点に甲佐社領の当知行を維持し、益城郡・阿蘇郡一帯の所領の回復のために行動した。その本拠としたのが甲佐城であるが、近年の調査の結果から陣ノ内城跡の可能性が高いと考えられている。戦乱が激しくなると、あちこちに臨時的な城郭が築かれることとなり、惟澄も矢部城・田口向城（現甲佐町田口だが所在未詳）・甲佐立早要害（甲佐町内だが所在未詳）など甲佐社領・益城郡内の戦略拠点で大規模な合戦を展開する。その後、正平19年（1364）、恵良惟澄は阿蘇大宮司に任命されるが、所領を嫡子惟村に譲り2か月後に死去する。

14世紀の内乱は京都では北朝方の勝利として終結しても、惟澄の嫡子惟村と次子惟武は対立に発展し、15世紀（室町期）の益城郡はそのまゝ一族が分裂し合戦にまで発展していた。両統が合体するのは宝徳3年（1451）で、実子のない惟忠が南郷の惟兼の子惟歳を養子として迎えて終結した。

甲佐を含む益城郡を統治してきた惟村系阿蘇氏は、合体によって存続の危機を乗り越え、阿蘇氏は阿蘇・益城の2郡と宇土半島の郡浦庄を統治する戦国期の有力地域領主となり、矢部の大宮司が阿蘇神社と共に統治することとなる（甲佐町教育委員会2015）。

しかし、その後も阿蘇氏は大友氏や菊池氏の動きと合わせてさらに混乱を極め、大宮司職を巡る一族内での対立を勃発させる。永正4年（1507）に大友氏の援援を受けて守護家を継いだ阿蘇惟長は、永正7年（1510）には子の惟前と共に隈府を去り、その後矢部を占領して惟豊と対立した。惟豊は矢部から一時日向鞍岡へ逃れるも、高千穂の甲斐氏の協力により矢部を回復、惟長親子は益城郡堅田城（美里町）に入り、惟豊と対立する。矢部地域から発生・流下する緑川の中流域にあり、松橋・小川・八代と矢部を結ぶ地域ネットワークの要所にある堅田は、近年の石造物調査や文献資料による裏付けもあり水陸交通の要所として団集落を形成し、甲佐を挟み矢部の浜の館と対峙する構造は戦国時代の甲佐の歴史に大きく影響を及ぼすこととなる。

この時期、「寝家」と呼ばれる益城郡東北部一帯に割拠する阿蘇惟豊家臣の中小在地領主の連合体が「八代日記」に登場する。「寝家」は阿蘇外輪山の裾野を領しており、その居城には津森城・木山城（益城町）、道上城（嘉島町）、隈庄城（熊本市）、御船城（御船町）、早川城・松尾城（甲佐町）、傍島入城（美里町）が考えられている（鶴嶋2002）。「寝家」は敵対する惟前をたびたび攻撃し、天文12年（1543）には堅田城を落城させる。「寝家」の存在は菊池義武を立て隈本入りし、戦国大名化しようとする相良氏を八代郡以南に押し込めた。このことは、肥後で一国レベルの大名が成長せず、豊臣氏の直接支配の対象となることへと繋がりが、天文期の「寝家」の動きは近世肥後国の歴史を左右したと指摘されている（稲葉2007）。

16世紀前半には町内でも石造物が多く作られ、生前供養を行う逆修碑（「津志田の逆修碑」・「下豊内の逆修碑」いずれも甲佐町指定文化財）は当時の厳しい社会情勢に生きる武士や地域民衆全体の信仰を色濃く反映する。中でも「下豊内の逆修碑」は阿蘇氏家臣の村山惟益夫婦が天文16年（1547）と同22年（1553）に建てる。14世紀の恵良惟澄の「甲佐城」以降、甲佐は早川と並ぶ阿蘇氏勢力の拠点となり、16世紀には戦国大名化した阿蘇氏の益城郡統治の基地として堅田城とともに戦略拠点化する。しかし天正13年（1585）閏8月13日、薩摩の島津氏により甲佐・堅田が落とされる。「上井覚兼日記」には島津氏が甲佐と堅田を攻略し、「甲佐之圍」を落としたとの記録が確認されている。「甲佐之圍」とは豊内地域に所在する松尾城跡又は陣ノ内城跡とみられる。また、同日記には「甲佐本地頭伊豆野方」（天正14年8月23日条）とあり、「古城考」で松尾城は「伊津野山城守」が在城したと伝えられ、現地には「本丸」や「味噌蔵」の地名が伝わる。

島津氏により益城郡の平野部を占拠された阿蘇氏は没落し、島津氏が肥後を統治下に置く。その後、豊臣秀吉により「九州惣無事令」が出され、天正15年（1587）豊臣大名佐々成政の統治となる。

佐々成政は天正15年（1587）6月2日に入国し、甲佐を含めた肥後一国を統治した。しかし、翌7月10日から天正16年（1588）1月までの間、肥後国全土にわたって蜂起した国衆一揆の鎮圧に注力している。

一揆鎮圧後は摂津尼崎で幽閉の後、閏5月14日に切腹を命じられている。したがって、佐々成政の実質的な肥後統治は約半年であった。

佐々氏の没落後、天正16年(1588)閏5月15日、豊臣秀吉は肥後国の北半国を加藤清正、球磨郡を除く南半国を小西行長に領有させた。小西氏は宇土・益城・八代・天草の4郡を統治し、本拠である宇土城を築城した。そして、八代城(麦島城、八代市)、矢部城(愛藤寺城、山都町)、隈庄城(熊本市)等を支城として整備した。しかしながら、小西氏の肥後統治は行長が慶長5年(1600)の関ヶ原で敗れたため、12年で終了している。その間、行長は豊臣政権の中枢に連なる大名として、秀吉と九州の諸大名との「取次」を務めつつ朝鮮出兵などに参加しており、実際に領国には1年半～2年程度しか留まることはできなかったものとみられている。

慶長5年(1600)の関ヶ原合戦で小西氏は滅亡し、甲佐は関ヶ原合戦の軍功で肥後国一円知行に増加された加藤清正が統治した。清正は肥後国内に熊本城を本城とした7支城の南関城(鷹ノ原城、南関町)、内牧城(阿蘇市)、矢部城(山都町)、宇土城(宇土市)、八代城(八代市)、佐敷城(佐敷花岡城、芦北町)、水俣城(水俣市)を整備している。

慶長16年(1611)7月23日、清正が死去し、三男の忠広が襲封するが、翌年、幕府から九ヶ条の統治策が下合され、宇土城・矢部城・水俣城が破却される。さらに元和元年(1615)「一国一城令」年寄連署奉書により、南関城・内牧城・佐敷城が破城となり、肥後国は本城である熊本城と八代城の2城体制となる。その八代城も元和5年(1619)の大地震で被災し、元和8年(1622)に対岸の松江城に新築移転している。そして寛永9年(1632)に謀叛の疑いで忠広が改易され、44年間の加藤氏による肥後国統治は終焉を迎える。その後細川忠利が入国し、明治に至るまで肥後国は細川氏によって統治された。



昭和22年11月19日 米陸軍撮影

写1 陣ノ内城跡周辺航空撮影

3 陣ノ内城跡の現況

(1) 地形

陣ノ内城跡は甲佐町の下豊内(しもどい)地区にあり、町の東端に位置する甲佐岳から伸びる尾根線の先端部に立地している。麓との比高差は64mを測り、丘陵上は平均標高100mの平坦地形を呈している。遺跡はこの平坦地形上のみ認められており、遺跡の認められない周辺の切り立った地形とは対照的である。平坦地形の骨格は約9万年前の阿蘇4火砕流によるものである。周辺は本来急峻な地形を呈していたために、その後火砕流は浸食されてしまっているが、平坦地形は火砕流の削り残しの部分にあたる(写1)。また、赤色立体図を用いて陣ノ内城跡周辺の地形を詳細に見ていくと、麓集落周辺には微高地と小規模な流路が確認でき、遺跡の西側崖下には旧緑川の流路が存在した可能性が指摘されている。

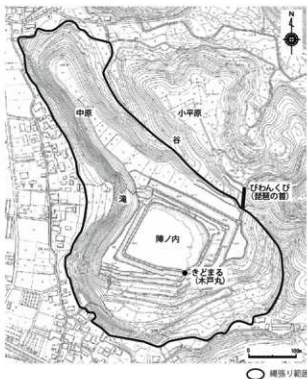


図3 陣ノ内城跡現況名称図

(2) 遺跡の現状

陣ノ内城跡が立地する丘陵は周囲の地形を含めると三分され、「陣ノ内(じんのうち)・「中原(なかばる)」・「小平原(こひらばる)」と呼ばれる平坦地形が存在する(図3)。このうち現況で堀や土塁などの遺構が確認されるのは、「陣ノ内」の地名を残す部分で、中原とは地続き、小平原とは「谷」とよばれる落ち込みを挟み「びわんくび(琵琶の首)」と呼ばれる土橋状の地形でつながっている。

陣ノ内城跡の中心である平坦部の規模は中心付近で東西方向に145m、南北方向に132mを測り、ほぼ方形を呈する(図4)。その形状は西側が開き、東側がすばまる地形をなしており、北東部から南西方向に向かって緩やかに傾斜する。南東端には地元で「きどまる(木戸丸)」と呼ばれていた場所が確認されている。

現在、この平坦地は主に南北に長軸をもつ短冊状を呈する畑地となっている。平坦部南側には2つの土塁状の高まりがみられる。高まりは8×3m、10×3mの楕円形状で、周囲の農地との比高差はおおよそ1.2mである。

平坦部を囲むように築かれた堀は、東側及び北側に認められる。東側の堀は、南北方向に走行し、上端で幅16m・下端で幅6m・延長で98mを測り、北端で東に直角に屈曲する。北側の堀は東西方向に走行し、上端で幅20m・下端で幅11m・延長で212mを測る。北側の堀の北西端は鉤状に屈曲しており、南北方向に上端で幅16m・下端で幅8m・延長45m、さらに東西方向に上端で幅20m・下端で幅11m・延長35m走行する。屈曲部の堀底は、東から延びる堀底よりも標高が1m程度高い。鉤状に屈曲した堀は、そのまま「滝」とよばれる急斜面に落ちる。この鉤状に屈曲した堀底には、甲佐の最有力商人の天野屋が安政4年(1857)に建立した稲荷大明神が祀られる。これらの堀の平面形はほぼ直線・直角で、屈曲は見られない。堀底は、現況は北東から北西に傾斜し、底の現況は平坦・台形をなす。また、南東側の堀の延長は、一部切り岸状の地形となっている。

上記の堀に沿うように平坦地との間には「あげつち(上げ土)」とよばれる土塁が形成されている。北側の土塁は、幅23～30m、平坦面からの比高差5m、延長170m、北西側で土塁の一部に、土塁上面からさらに最大比高差2m、東西延長60mで高まりがみられる。北側土塁は中央部分が狭れ、弧状をなす。東側土塁は幅13～15m、平坦面からの比高差3～4m、延長100mを測る。東側土塁は、北側土塁が北東側で南に直角に屈曲し南北方向に伸びたもので、北側土塁と比較して1.5m程度低い。東側土塁の更に東には、方形区画が3面にわたり形成される。

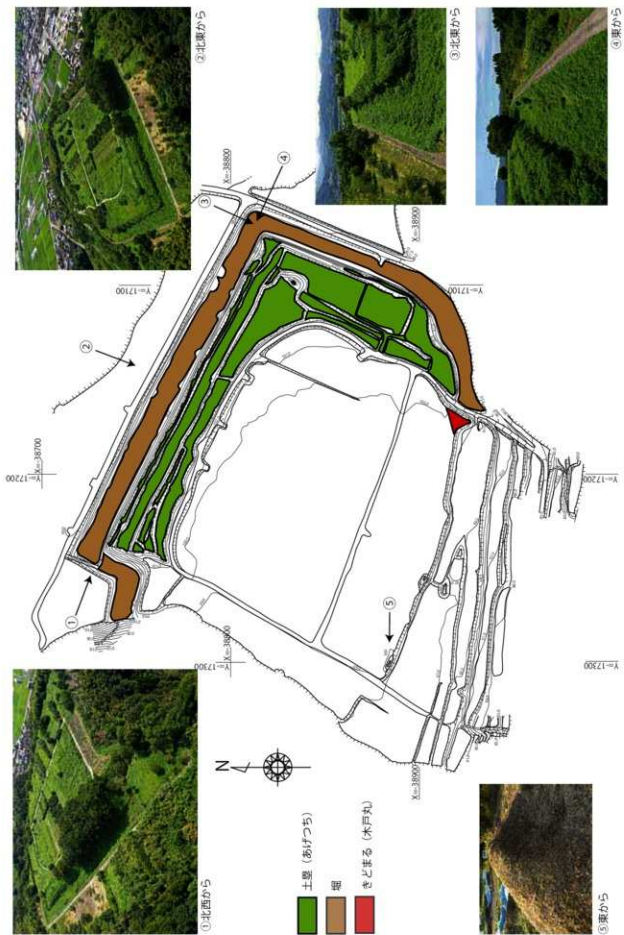


図4 陣ノ内城跡郭内地形図 (S=1/20000)

第3章 調査成果

この章では、26年度報告書にて報告した内容についてまとめ、紹介する。

1 発掘調査

平成20年以降の発掘調査では、「陣ノ内」の字を残す平坦地及び土塁の32箇所を確認調査を行った(図5)。その結果、中心平坦部に石列遺構、土塁上で石敷き遺構、平坦部南側及び西側で堀(図6)・土塁(図7)、平坦部南東側で虎口(図7)を確認した。

なお、堀の内側は砂礫層で脆弱なため、陣ノ内館跡調査専門委員会で検討した結果、遺構の保護を優先して未調査としている。

石列遺構は平坦部中央部(Ⅰ区及びⅡ区)で確認した。遺構は溝状遺構に伴うもので、大半の石材は自然石で構成されているが、一部に加工痕が残る石材が一部認められる。その規模は幅約1.0m、全長約16.0mを測る。出土遺物は13世紀後半の陶磁器が中心であるが、磨滅が著しい破片のみで時期の確定は判断し難い。石列遺構は陣ノ内城跡平坦部の北西部分を囲むように出土しているが、全体を囲うものではない。隣接地より建物遺構などは検出されていないが、出土状況から建物等の区画を示す遺構と考えられる。

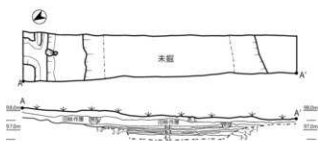
石敷き遺構は北側土塁上(16・20・23トレンチ)で確認した。確認調査及び分布範囲確認調査、レーダー探査(熊本大学工学部)の結果、遺構は土塁上を東西方向に連続することが確認できたが、土塁東端には至らない。また、明確に時期を特定する遺物の出土もみられなかったため、その性格は不明である。



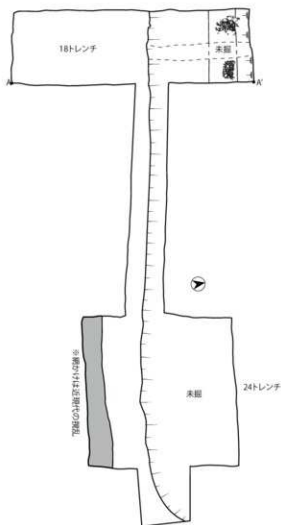
図5 陣ノ内城跡遺構全体図 (S=1/2000)



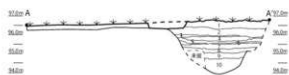
14トレンチ 堀検出状況 西から



14トレンチ平面・土層断面図 (S=1/200)



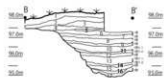
18・24トレンチ平面図 (S=1/200)



18トレンチ土層断面図 (S=1/200)



21トレンチ 堀埋土堆積状況 南から



21トレンチ土層断面図 (S=1/200)



24トレンチ堀検出状況 東から

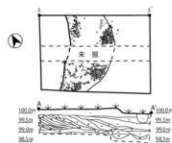
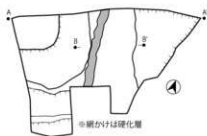
図6 陣ノ内城跡調査成果図1



25トレンチ 土壁検出状況 北東から



25トレンチ 土壁堆積状況 南から



25トレンチ 平面・土層断面図 (S=1/200)



27トレンチ 平面・土層断面図 (S=1/200)



27トレンチ 虎口出土状況 東から



27トレンチ 虎口出土状況 南から



27トレンチ 土壁堆積状況 北から

図7 埴ノ内城跡調査成果図2

平坦部南側の堀（7・13・14・18・24トレンチ）は東西方向に約155m走行する。東西端に比べて中央部がやや狭くなり、中央部では北側に屈曲する「折れ」が確認される。その幅は東西端で約8.5m、中央部で約5.8mを測る。検出面からの深度は約2.7mを測り、深さはほぼ均一である。堀底の形状は平坦で箱堀状を呈している。

南側の堀から連続する西側の堀は（15・21・29・30トレンチ）、南側の堀から北方へ直角に屈曲した後約120m走行した後、北端で収束する。その幅は約7.5m、検出面からの深度は約2.7mを測る。堀の規模や堀底の形状は南側の堀と同様である。

これらの堀に沿うように土塁が築かれている（25・27～30トレンチ）。土塁の上方の当時の姿は削平のために不明であるが、下端の幅は南側の土塁が約5m、西側の土塁が約10mと推定される。その構造は堀掘削時に発生した土砂や削った自然堆積層を用いて造成した盛土であることが、各トレンチ（25・28・29トレンチ）の土層堆積状況から確認されている。また、現存する北側土塁の構造も同様である（8・17・19・25・26トレンチ）。

発掘調査で確認された堀や土塁は、堀の土層断面及び堀底の出土遺物から19世紀以降に土塁を崩しながら人為的に埋め戻されたことが確認できる。

また、「きどまる（木戸丸）」の地名が残る平坦部南東端（27トレンチ）では、東西土塁がわずかな高まりとなって残り、これらの土塁が切れている箇所に幅2.4mの窪地部分が確認されている。この窪地部分には硬化石も確認されており、陣ノ内城跡の虎口と考えられる。

以上の発掘調査の成果及び現況の堀・土塁の状況から、陣ノ内城跡は南東端に虎口を構え、平坦部の四方を堀と土塁で囲った方形主郭の縄張りを持つ城であったことが確認された。

2 出土遺物

出土遺物は縄文時代～近現代まで数時代にわたって出土している。陣ノ内城跡では14世紀以降の遺物を含む包含層が平坦部南側（3トレンチ以南）では後世に削平されているため、遺物の出土量は平坦部南側が極端に少なく、土塁を除く外周部にまとまって出土する傾向にある。しかしながら、これらの遺物の出土量は僅少であり、いずれも破片がほとんどであった。また、明確に遺構に伴って出土するものも少なく、必ずしも遺構の時期を示すものではない状況にある。そのため、遺物を遺構と関連付けてその組成や出土量を組み合わせて、陣ノ内城跡の時代性や地域的様相を図ることは難しい。しかし、遺物を総合的にみるといくつかの時期の遺物群に分けることができ、これは陣ノ内城跡が所在する台地上における人々の活動を知るための重要な根拠となりうると考えた。

そのような視点から検討することで、遺物を4期に大別した（写2）。

1期は12～14世紀を主体とした遺物群である。貿易陶磁器では同安窯・龍泉窯系の青磁、華南産の白磁が出土している。また、高麗象嵌青磁も1点出土している。国産のものとしては、東播系の須恵器の他、古瀬戸の陶器も出土している。器種は、いずれも椀・鉢が主で今回調査した土塁上を除くトレンチ全体から出土するが、当該期の遺構は確認できていない。

2期は16世紀前半から後半の遺物群である。主に景德鎮窯の染付が出土する。いずれも破片であるが、器種は椀が主である。

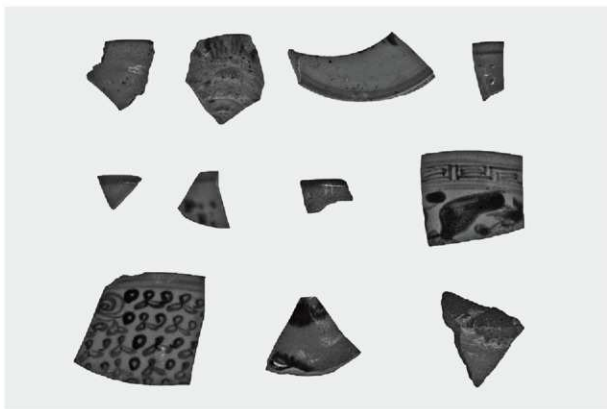
3期は16世紀末から17世紀前半の遺物群である。漳州窯系の陶磁器が出土する。器種は皿が主体である。

4期は19世紀以降の遺物群である。当該時期の肥前系の陶磁器が旧耕作層や堀の埋土から多く出土する。旧耕作層や堀の埋土から多く出土している。

以上のことから、陣ノ内城跡の所在する台地上では、中世から長期間にわたって断続的に土地利用され続けていたことが確認できた。



出土陶磁器 12世紀～14世紀



出土陶磁器 16世紀～17世紀

写2 障ノ内城跡出土遺物

3 登城道調査 (図8)

登城道調査では台地上へ登るための南側及び西側の2ルートについて検討した。いずれも聞き取り調査及び地形図・字図の判読を元に行っている。その結果、南側登城道は麓集落の登城道入口から陣ノ内城跡虎口までをほぼ推定できた。

一方、西側登城道は字図上では麓集落から陣ノ内城跡北側堀まで登り上がる城道を推定した。しかし、陣ノ内城跡西側斜面部は昭和47年の集中豪雨によるかけ崩れにより、現状では登城道の痕跡は確認できない。

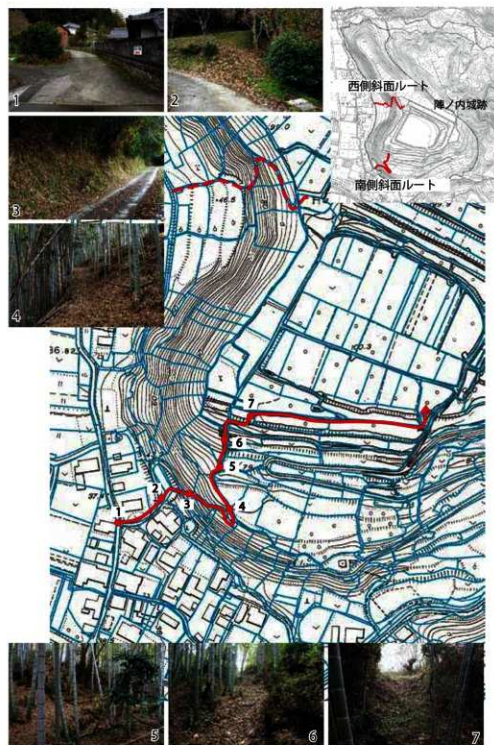


図8 登城道図 (赤：登城道 青：字図)

4 地名の聞き取り調査 (図9)

発掘調査では確認できない地域に残る歴史を復元し、発掘調査成果と併せて検討することを目的に土地のいわれや旧地名等の聞き取り調査を実施した。その結果、寺院や町屋、城の入口や施設に関する地名が確認できた。

・「安養寺」「法然寺」

肥後の地誌「国郡一統志」にある「安養寺」は「あんよじ」、「法念寺」は「ふねじ」として上豊内地域の地名に残る。陣ノ内城跡南東側斜面中腹の「寺尾」では「五輪塔群が出土した」とのことからここにも寺院の存在が推測できる。

・「こうや (紺屋)」、「いせや (伊勢屋)」

南西斜面下には、上記の屋号をもつ家(双方とも現在は農家)があり、陣ノ内城跡の麓が町場的な性格をもつ地域であったことが伺える。

・「しもんきど (下の木戸)」、「しもんやしき (下の屋敷)」

西側崖下には「しもんきど (下の木戸)」、「しもんやしき (下の屋敷)」とあり、緑川を中心に下流側という意味で「下」を用い、入口や屋敷があったことが伺える。

・「みせんさか」

現在残る南から登る城道は「みせんさか」と呼ばれ、現在も農作業時に使われている。

・「あげつち (上げ土)」

現況に残る土塁は「あげつち (上げ土)」と呼ばれ、土塁の盛り土成形を示唆しており、発掘調査成果とも合致した。

・「きどまる (木戸丸)」

平坦部の南東は「きどまる (木戸丸)」と呼ばれ、虎口を示唆しており、発掘調査成果とも合致した。

・「みはりだい (見張り台)」

北東の2個所を「みはりだい (見張り台)」と呼び、北東の守りを固めたことが伺える。

また、陣ノ内城跡が所在する大字名「豊内」についても調査を実施した。現在では「豊内」は「とようち」と表現される。しかし、現地の老齢世代は「どい」又は「どいのうち」と呼ぶ者が多く、若年世代は「とようち」と読む者がほとんどである。

もともとこの地域は、肥後国絵図(慶長国絵図)には「どいの内」、寛永10年(1633)の史料には「土居之内」「土井の内」「どいの内」「どいのうち」等で示される(東京大学史料編纂所 1976・1988)ことから、江戸初期には「どいのうち」と称されていた(花岡興史・佐藤征子氏からの教示による)。現在確認される「とようち」の初見は、明治34年初版明治37年内務省認可の日本加除出版株式会社が刊行する『日本行政区画便覧』で、「豊内」に「とようち」とふりがなが付されており、この頃から行政上では「とようち」の名称が使われ現在に至る。ちなみに明治34年測図、35年製版の大日本帝國陸地測量部で作製した地図では「豊内」には「どい」のふりがなが付されるが、移動や補給経路等の関係から現地では使われる地名を使う必要があったためと推測される。この「どい」というふりがなは、その後昭和29年発行のものまで使われ、昭和45年以降国土地理院発行のものでは付されない。

「どい」は、屋敷や集落の周りをめぐらした土塁等をさし、小字名「陣ノ内」とともに現地を土塁で囲った城郭の存在を強く示唆するものである。しかし、「豊内」を「とようち」とする表現は確実に定着しており、地域の歴史を示す本来の読み方は失われつつある。

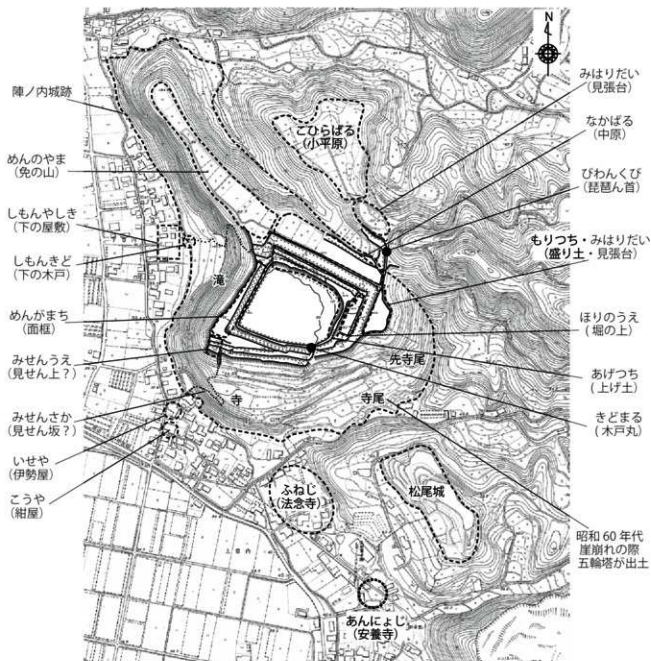


図9 地名の聞き取り調査図

5 文 献

陣ノ内城跡の文献調査は陣ノ内館跡調査専門委員でもある稲葉継陽氏（熊本大学文学部教授 当時）に依頼した（稲葉 2015）。以下、その概要を記載する。

稲葉氏は、陣ノ内城跡（文献上では陣ノ内館跡）が明確に記録された一次史料は現在まで確認されていないが、陣ノ内城跡に関連すると考えられる14世紀・16世紀・17世紀・近世中期の史料を用いて文献史料からみた陣ノ内城を明らかにした。

その結果、14世紀・16世紀の文献史料からは、恵良惟澄の詰の城である「甲佐獄」（恵良惟澄軍忠状（阿蘇家文書）や本城であった「甲佐城」（同前）、島津氏に落とされた「甲佐の圃」（『上井覺兼日記』天正13年間8月13日条）などを確認し、直接的には陣ノ内城跡を示す記載ではないが、陣ノ内城跡を想起させるものとした。

また、17世紀の豊内地区に関する文献史料中に、幕府が加藤家から細川家に替った直後（寛永10年（1633））の肥後の状況を把握するために巡検使を派遣したことに関する一次史料（細川忠利書状写（『三斎様江御書案文』永青文庫4.2.104）、細川三斎書状（永青文庫13印38番）、細川三斎書状（永青文庫13印39番））を確認している。あわせて、現在、永青文庫「細川家文書」に伝えた肥後慶長国絵図写には、この時の巡検使＝上使衆が宿泊した場所に付箋が貼られており、その中に陣ノ内城跡が所在する「豊内」があったことが確認されている。上使衆の目的は戦国～織豊期城郭の現状調査が主要なものであり、宿泊地に選定された場所はいずれも中世以来の町場であったことを指摘している。

さらに、陣ノ内城跡が築造された後であろうと考えられる17～18世紀に記録された史料中には、「陣の内」という呼称の初出であるとされる「拾集昔語」（元禄8年（1695）渡辺玄察著）や当時の遺構の状況、歴史認識が記載された「古城考」（天明8年（1788）森本一瑞著・横田日敦増補）や『肥後國誌』（明和9年（1772）森本一瑞著・明治17年（1884）水島貫之増補・大正5年（1916）後藤是山改定増補）があることを確認し、陣ノ内城跡を「阿蘇の大宮司の館跡」とする認識が近世中期以降にひろまったことを指摘した。

6 県内の城郭との縄張りの比較

県内の城郭との比較は鶴嶋俊彦氏（熊本城調査研究センター 当時）に依頼した（鶴嶋 2015）。以下、その概要を記載する。

鶴嶋氏は、陣ノ内城跡には絵図などの一次史料はなく、出土遺物も僅少であるため、普請された年代や築城者の特定は困難であるが、陣ノ内城跡の構造を東西南北とも横掘と土塁がセットとなった防塁で囲繞された方1町強規模の方形プランの城郭であるとして、遺跡の年代や築城者を推定する方法として縄張り技術の把握を有効な手段とした。そこで、まず江戸時代の編纂物に陣ノ内城跡の城主として記載された人物（阿蘇惟時・惟前）に関わる二本木前遺跡（南阿蘇村）や浜の館跡（山都町）、堅志田城跡（美里町）等との比較を行った。その結果、阿蘇氏関係の城館は切岸に頼った未熟なもので防御性が弱く、陣ノ内城跡と比較して規模・構造には大きな格差があり、陣ノ内城跡を「阿蘇の大宮司の館跡」とする近世編纂物の記述は信用しがたいとした（鶴嶋 2015）。

次に、陣ノ内城跡の直線状土塁や空堀、土橋、塁線の「折れ」、鍵型に屈曲する城道に有機的に配置して防御する縄張りは織豊系城郭と共通するものとした。そこで、陣ノ内城跡の横掘に着目し、豊臣直系大名の加藤・小西権力によって普請（新城・改修）された宇土城や麦島城、熊本城、南関城等の肥後国内城郭の横掘と比較を行った（表1・図10）。その結果、小西行長の支城の横掘の規模が陣ノ内城跡と同規模であることや、石垣を使用しない素堀である共通性を提示し、陣ノ内城跡の築城者を小西行長とした。

あわせて、陣ノ内城跡の出土遺物の僅少な点や建築遺構が明確ではない点に着目して、築城途中での普請中止の可能性を示唆している。

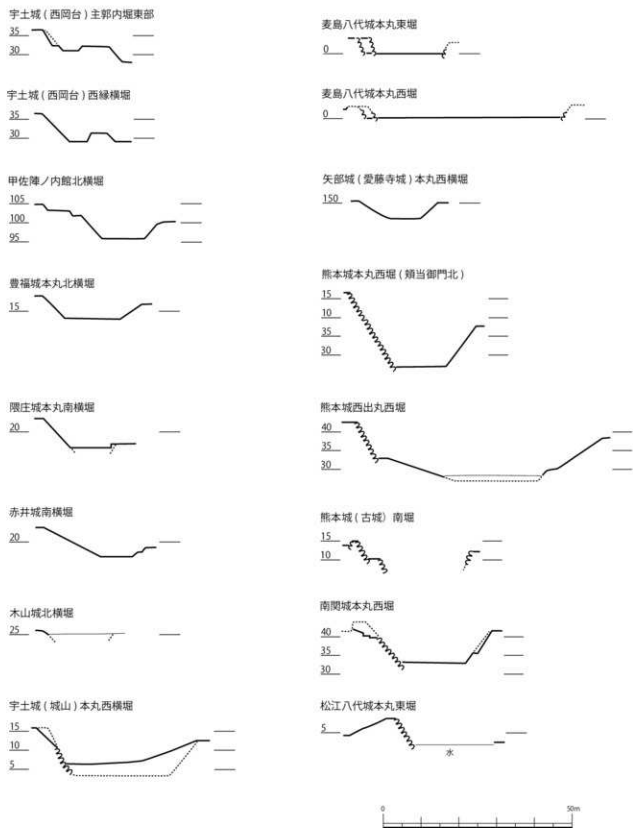


図10 肥後国主要城郭の横堀断面図 (鶴崎 2015 より)

表1 戦国期・小西・加藤の城郭の横堀比較表

築城時期	城郭名・比較横堀位置	幅 (m)	深 (m)	備考
	陣ノ内城・北横堀	18.0	6.0	
戦国期	宇土城(西岡台)・主郭内堀	10.0	5.5	中世宇土城=戦国期 名和氏の居城
	宇土城(西岡台)・西縁横堀	13.0	7.3	
小西	隈庄城・本丸南横堀	19.5	8.0+ α	加藤の改修の可能性 あり
	矢部城(愛藤寺)・本丸西横堀	21.0	4.5+ α	
	赤井城・南横堀	27.0	8.0	
	豊福城・本丸北横堀	26.5	6.0+ α	
	木山城・北横堀	18	不明	
	八代城(変島)・本丸東堀	24.0	4.0+ α	
加藤	宇土城(城山)・本丸西横堀	39.5	13.0	近世宇土城
	熊本城(古城)南堀	24.0	8.0+ α	
	熊本城・本丸西堀	33.0	20.0	
	熊本城・西出丸西堀	64.0	14.5	
	南関城・本丸西堀	33.0	10.5	
	八代城(松江)・本丸東堀	25.0	7.0+ α	

7 小 結

現況及び平成20年度より実施された発掘調査によって、陣ノ内城跡は遺跡の中心に総面積約1.9haを測る方形の平坦部を持ち、その四方が屈曲部を持つ直線的な堀及びそれに沿う土塁に囲まれ、平坦部南東端に虎口を持つ城跡であったことが明らかになった。また、平坦部南東端に普請された虎口は登城道調査によって推定した南登城道からの虎口と考えられ、当該地には地名調査で判明した「きどまる(木戸丸)」の地名が残っていることから発掘調査の結果と合致している。さらに、現存する堀の北西端で確認される「鉤形」の折部についても、その形状や陣ノ内城跡の西側登城道と推定される箇所と接続しており、陣ノ内城跡の北西側の虎口として推定される。

以上のことから、26年度報告書では、陣ノ内城跡を「南東及び北西端に虎口を構え、2箇所の屈曲した堀を持つ城」と推定し、近世初期の「織豊系城郭」とであると結論付けた。なお、築城主体については小西行長の可能性を示唆した。また、陣ノ内城跡西側崖下に流路が存在した可能性や陣ノ内城跡の南側と西側に登城道(図10)が推定されていることを踏まえて、陣ノ内城跡の縄張りには中原地域を含む丘陵全体と想定した(図4)。

第4章 総括

前章では26年度報告書の内容を紹介した。それによると、陣ノ内城跡は南東及び北西端に虎口を構え、2箇所の屈曲した堀を持つ近世初期の「織豊系城郭」であり、築城者は小西行長である可能性が極めて高いとした。

それでは、小西行長が陣ノ内城を甲佐のこの地に築いたのはどのような意図があったのか。ここでは、陣ノ内城と他の小西の城郭とを新たに比較検討し、26年度報告書作成以降に実施した文献や絵図調査の成果をふまえて、陣ノ内城がこの地に築かれた意義を考察し、その歴史的価値についてまとめる。

1 陣ノ内城と豊臣大名

当該期に甲佐を統治した豊臣大名としては佐々成政(以下、「佐々」という)や小西行長(以下、「小西」という)、加藤清正及び忠広(以下、「加藤」という)が挙げられる。そこで、これら3氏の築城主体としての可能性について検討する。

佐々が甲佐を統治した期間は1年未満(天正15年(1587)6月～天正16年(1588)5月)であり、国衆一揆鎮圧(天正16年(1588)1月)後は摂津尼崎で幽閉されたことを考慮すると、佐々の実質的な肥後統治は半年程度であったものとする。また、佐々は本城として隈本城(古城)を居城としたことは確認されるが、他の城郭整備に関する一次史料は現在のところ確認されておらず、考古学的にも肥後国内で佐々の城郭と断定できる城郭は明らかではない。隈本城(古城)においても、佐々の改易後には加藤の本城として再利用されているために佐々の肥後国内での城郭については不明と言わざるを得ない。しかしながら、約半年であった統治期間の大半を肥後国衆一揆の鎮圧に注力せざるを得なかった点や、佐々の改易後に肥後の南半国を宛がわれた小西の宇土城(本城)への移転は入国1年後であった点や、加藤は隈本城を含めて在来の城郭を継承・利用するよう秀吉から指示されていた点などを考慮すると、佐々が入国直後から領内の城郭の整備、特に本城ではない支城の整備が着手できたとは考え難い。

加藤が甲佐を統治した期間は32年(慶長5年(1600)～寛永9年(1632))であった。加藤は関ヶ原合戦の軍功によって肥後国一円地行に増徴されている。支城の整備については慶長12年(1607)頃に成立した肥後国絵図(慶長国絵図)に7支城が記載されており、熊本城を中心とした支城網を整備したことが確認できる(図11)。

これらの城郭は発掘調査の結果、瓦葺の礎石建物と石垣を備える所謂「織豊系城郭」であったことが確認されている(図12・13)。また、支城の配置についても本城である熊本城を起点として領内を縦横に貫くように整備された4つの街道沿いに配している。これらのことから、絵図に記載がなく、瓦葺の礎石建物と石垣が確認できず、街道沿いにも立地していない陣ノ内城が加藤の築城とは考え難い。

よって、佐々、加藤による築城は築城時期の整合性や築城技術の明確な違いから、この2氏によるものとは考え難い。

小西が甲佐を統治した期間は12年(天正16年(1588)5月～慶長5年(1600))である。そこで、あらためて小西の城郭を概観し、諸要素を比較して陣ノ内城と小西の城郭について検証する。

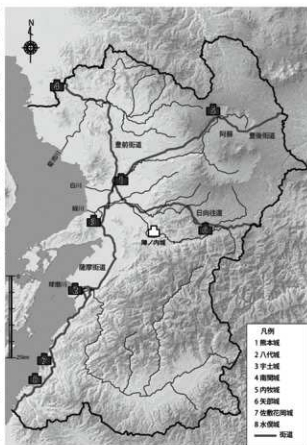
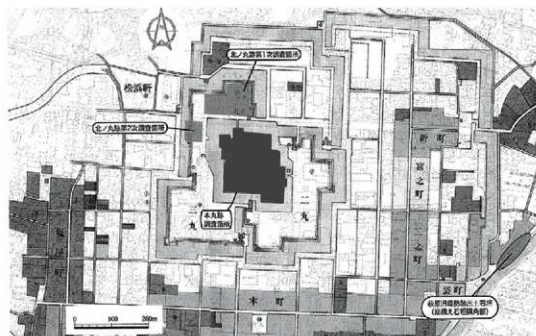


図11 加藤一統統治期の城郭及び街道配置図



八代城（松江城）(2)



南関城（厩ノ原城）(4)



佐敷花岡城 (7)



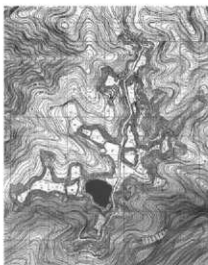
水保城 (8)

- ※ 磁北は上方向を指す
- ※ ● は本丸を表す
- ※ 城名後ろの(番号)は図11に対応する
- ※ 城郭図は各報告書より引用し、一部改変する

図12 加藤の城郭測量図及び補張図1 (S=1/10000)



宇土城 (鶴島俊彦氏作成) (3)



矢部城 (6)

- ※ 磁北は上方向を指す
- ※ ● は本丸を表す
- ※ 城名後ろの (番号) は図 11 に対応する
- ※ 八代城・矢部城は各報告書より引用し、一部改変する



八代城 (麦島城) (2)

図 13 加藤の城郭測量図及び縄張り図 2 (S=1/10000)

2 小西の城郭について

小西の城郭の記述は日本の一次史料には存在せず、宣教師によって作成されたイエズス会の史料中に宇土城 (宇土市) と八代城 (八代市)、隈庄城 (熊本市)、矢部城 (山都町) の 4 城が確認されている。また、近世中後期に編纂された史料 (国部一統志、古城考、肥後國誌) からは前出の 4 城に加えて岩尾城 (山都町) と木山城 (益城町) の 2 城が確認されている。さらに、近年の織豊系城郭及び縄張り研究の進展によって豊福城 (宇城市) と赤井城 (益城町) も小西の城郭と考えられている (鶴嶋 2003・森 2010)。

ここで近世中後期の史料のみに認められる岩尾城、木山城について検討する。

岩尾城は矢部城の北方約 4 km に所在しており、矢部城と近接する城郭である。しかし、矢部城がイエズス会史料や慶長 9 (1604) ~ 10 年 (1605) に作成された「肥後国絵図 (慶長国絵図)」においてその存在が確認される一方、岩尾城の記載は認められないことから、後世の記録類の誤りと判断されており、岩尾城は小西の城郭と捉え難い (山都町教育委員会 2012)。

また、木山城は赤井城の北方約 1 km に所在しており、赤井城と近接する城郭である。細川の統治期に作成された「肥後国絵図 (正保国絵図)」及び「肥後国絵図 (天保国絵図)」には「木山古城」の記載が認められる。しかし、「木山古城」と記載された位置は現在の赤井城の場所であり、木山川の右岸に所在する木山村周辺には「古城」の表記は認められない。したがって、当時は現在の木山城ではなく、赤井城が「木山古城」として認識されていたものと考えられ、木山城は小西の城郭とは捉え難い。

よって、本書では小西の城郭を宇土城、八代城、矢部城、隈庄城、赤井城、豊福城とし、あわせて陣ノ内城について検討する (図 14)。

なお、小西領には宇土・益城・八代郡に加えて天草部もあるが、現在のところ天草の城郭については詳細が不明であるため、今回は検討対象とはしない。

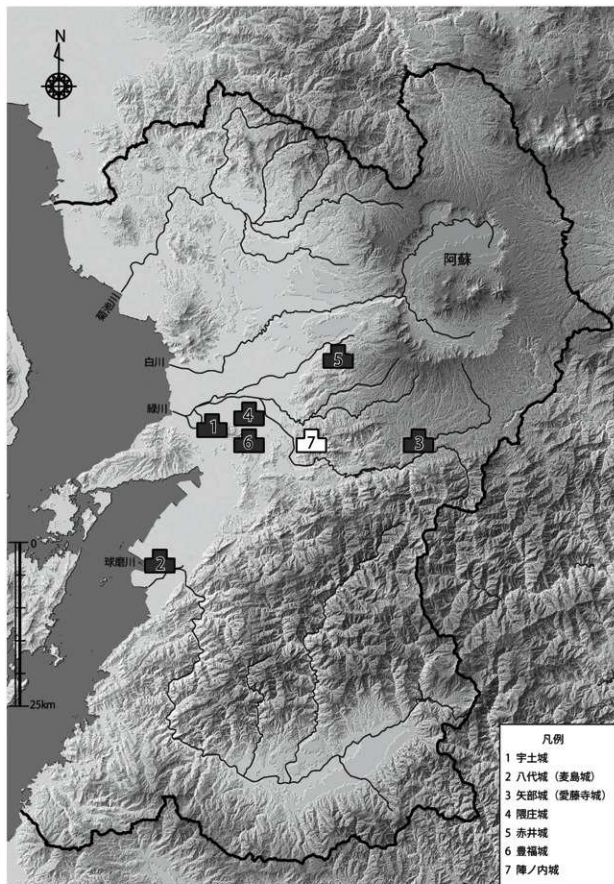


図 14 小西の城郭配置図

3 小西の城郭の様相

ここでは、小西の城郭とした6城について概観する(図15)。

(1) 宇土城

宇土市古城町・神馬町に所在する。宇土半島の基部に広がる沖積平野西部の独立丘陵上に立地し、最高所の本丸跡は標高16.3m(比高13m)を測る。現在は西側に広がる沖積平野の北西約6kmに有明海の江線が認められるが、小西が統治した時期には城下近くまで船寄が可能であったとみられ、本丸の北側には緑川に通じる運河が存在し、有明海を通過する船が行き来したと推定されている。

小西行長は、入国直後には近世宇土城の西方660mの独立丘陵(標高39m)にある中世宇土城を居城とした。中世宇土城は南北朝時代から戦国時代にかけて宇土を統治した名和氏の居城であった。しかし、翌年には新たな本城として、近世宇土城の築城に取りかかるとされる。小西の滅亡後、近世宇土城は加藤清正の支城として整備されたが、清正死去の翌年慶長17年(1612)に幕府老中定書による指示により破却された。

現存する城郭は加藤が統治した時期のものである。城の構造は方位軸に沿った本丸を横堀が囲み、その外側に配置された他の曲輪群をさらに横堀が囲む。城域は東西550m、南北500m、本丸は東西150m、南北130mを測る。本丸の発掘調査の結果、上層期遺構(加藤)と下層期遺構(小西)の2時期の存在が明らかとなった。上層期遺構では門跡や礎石建物跡、排水溝跡、石垣等の城郭遺構や、瓦や陶磁器(16世紀末の白磁等)、土師器等の遺物も出土した。下層期遺構では自然石を利用した石垣や礎石建物跡等が検出された。下層期遺構は上層期の盛土や石垣によって埋没しており、下層期の詳細な縄張りの復元は困難である。

(2) 八代城

八代市古城町に所在する。球磨川と前川に挟まれた海拔2~4mの中洲に立地する。築城当時は現在の前川はなく、麦島城の北側には大きな入江があり、徳津津が設けられた水運の拠点であった。

八代城は小西行長の肥後入国後から築城され、小西行重が城代として入城したとされる。小西の滅亡後、麦島城は加藤清正の支城として整備され、元和元年(1615)「一国一城令」年寄連署奉書後も存続したが、元和5年(1619)3月に起こった地震によって倒壊し、元和8年(1622)に麦島城から北東へ約1kmの松江の地に移る。

平成18年の発掘調査及び絵図等の検討によって城の構造は方位軸に沿った本丸を横堀が囲み、その外側に配置された他の曲輪群をさらに横堀が囲むことが推定されている。城域は南北350m、東西400m、本丸は東西幅131m、南北幅120mを測ることが想定されている。しかし発掘調査によって、現在の城域は加藤のものであり、小西の本丸の東西幅は120mであったことから、小西から加藤への城主交代によって本丸の東西幅は10m拡張したことが確認されている。また、小西に関連するものとして、加藤の遺構に埋設された石垣や礎石建物、滴水瓦、李朝系瓦などが挙げられる。

(3) 矢部城

上益城郡山都町大字白藤に所在する。緑川と支流である千滝川の合流点に近い台地先端部の丘陵上に位置し、三方を高低差約100m以上の峡谷に囲まれており、河川からの比高差は約250mを測る。眼下には緑川を望む。

矢部城は16世紀前半以降に阿蘇氏による築城と推定され、天正16年(1588)からは小西行長の支城として改修されたと考えられる。矢部城にはキリシタンの結城弥平次が城代として入城し、矢部にて布教活動を行っていたことがイエズス会の史料から確認され、城内ではイエズス会の紋章をモチーフとした十字瓦が表面採集されている。小西の滅亡後、近世宇土城は加藤清正の支城として整備されたが、本城は清正死去の翌年慶長17年(1612)に幕府老中定書による指示により破却された。

城の構造は南北600m、東西550mの範囲にやや東にずれた南北方向に延びる丘陵尾根を主軸とし、東西に派生する尾根に曲輪を設ける構造である。小西による改修以降、織豊系城郭の縄張りが導入され、本丸



宇土城 (鶴島俊彦氏作成)



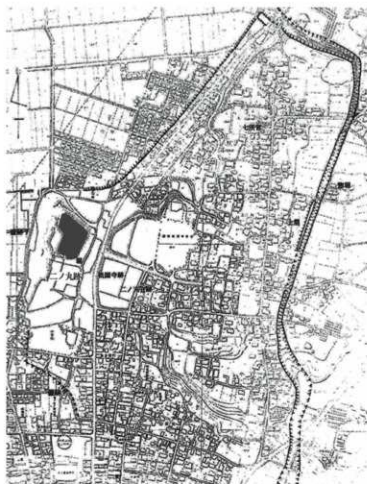
豊福城 (鶴島俊彦氏作成)



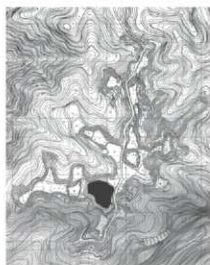
赤井城



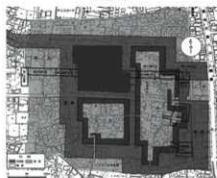
陣ノ内城 (鶴島俊彦氏作成)



隈庄城 (鶴島俊彦氏作成)



矢部城



八代城

※磁北は上方向を指す ● は本丸を表す
 ※八代城・矢部城・赤井城は各報告書より引用し、一部改変する

図 15 小西の城郭測量図及び縄張図 (S=1/10000)

の西側には他の横堀とは異なる直線的な横堀が普請されている。加藤の時期の本丸は長軸 72 m、短軸 59 m を測り、石垣や虎口などが確認され、中世の形態を留める曲輪群を虎口の内側に取り込んでいる。

(4) 隈庄城

熊本市南区城南町大字隈庄に所在する。緑川と浜戸川に挟まれた平野を一望できる舞の原台地の最西端に突出している「城の鼻」と呼ばれる標高 25.7 m の高台に立地する。

元中 4 年 (1387) 7 月 4 日付征西將軍良成親王令旨 (相良家文書) に「隈田山城落居」とあるが、詳細な築城時期は不明である。

戦国期に入ると、相良・阿蘇氏による係争の地となり、天文年間には阿蘇氏家臣の甲斐氏の統治下に置かれ、天正 16 年 (1588) 小西行長の入国時期には弟の小西主殿助が配置されたとされる。

城域は本丸のある高台から東へ約 350 m 地点に「新堀」「築堀」と称される堀跡が認められることから周囲約 850 m に及ぶと考えられている。本丸は方形を基調として南北 92 m、東西 71 m を測る。その周囲は横堀と切岸が囲み、西側の塁線は「折れ」が確認され、東・南側には横堀が確認されている。その外側に二ノ丸など他の曲輪が配置されると推定されている。周囲には「天守跡」「二ノ丸」と呼ばれる区画もあるが、「天守跡」だけが公園として残っているほかは、熊本市南区城南総合出張所・中学校などの敷地になっており、旧地形をとどめていない。

(5) 赤井城

上益城郡益城町大字赤井に所在する。赤井川 (緑川水系木山川支流の一級河川) の左岸、標高 32 m の独立丘に所在する。

天文年間 (1532 ~ 1555) 頃まで益城一帯は阿蘇氏家臣の木山氏が統治しており、天文 16 年 (1547) 木山城主の木山惟久が築城して移り住んだとされ、天正 13 年 (1585) 島津氏に責められて落城する。

本丸は方形を基調とした南北 50 m、東西 40 m を測り、その南・西側に配置された他の曲輪群の北・東側を横堀が廻る。

(6) 豊福城

宇城市松橋町大字豊福に所在する。現在の豊福城は近世以降の干拓によって海岸線から約 4 km 東方の標高 15 m の段丘上に立地するが、築城当時は旧海岸線に近い場所に立地していた。豊福の地は宇土・益城・八代三部の境にあり、肥後中北部の平野地域から宇土・八代をへて葦北・薩摩へと通じる要道と内陸部から宇土半島へ通じる要道の結節点にあった。また、宇土半島南部の基部は干拓以前には広い入り江をなしており、松橋津が設けられるなど水陸交通の要衝であった。そのため、豊福は 15 ~ 16 世紀後期まで名和・相良・阿蘇氏による領土争争が絶えない係争の地であった。

豊福城は 14 世紀に名和氏によって築城されたとされ、その後名和・相良両氏によって略奪・奪還が繰り返されていった。

本丸は方形を基調とした南北 42 m、東西 68 m を測る。本丸には当該地を東西に分けていた段差があったが、昭和 49 年にゲートボール場の造成のために消滅した。その南を除く三方には横堀が廻り、その外側に配置された他の曲輪部をさらに横堀が囲む。特に土塁状の形態を呈した東側は大きく削平され、多量の中世期の遺物が確認されている。現在、周辺は水田、レンコン畑となっていることから、堀は水堀であった可能性もある。また、豊福城には石垣があったが、昭和 3 年の三軒屋新地 (干拓) の築堤に利用されたとの伝承も残されている。

以上、6 つの小西の城郭を概観した結果、各城郭の特徴をまとめると次の表のようになる (表 2)。

宇土城・八代城・矢部城は小西の滅亡後、加藤の支城として改修されており、小西の縄張りをもとの程度留

めているかは不明である。しかし、本丸を中心とした城郭の縄張りは基本的には小西のものを踏襲したものと考えられており、本報告書でもこれを支持し、各城郭の比較を行う。

表2 小西の城郭の構成要素一覧表

	比高 (m)	本丸 (m)		堀堀	石垣	瓦	礎石建物	加藤による 改修	イエズス 会史料	正保・天保 国絵図
		長軸	短軸							
宇土城	13	150	130	○	小西石垣	○	○	○	○	○
八代城	2	131	120	○	小西石垣	○	○	○	○	○
矢部城	250	72	59	○	加藤石垣	○	?	○	○	○
隈庄城	20	92	71	○	伝承あり	?	?	-	○	○
赤井城	30	50	40	○	?	?	?	-	×	本山古城
豊福城	5	68	42	○	伝承あり	?	?	-	×	○
陣ノ内城	64	145	132	○	?	?	?	-	×	○

各城郭の本丸の形状は方形を基調とし、本丸を明確に区画する直線的な堀を普請することも共通している。この堀は戦国期・小西・加藤の城郭の堀を比較検討した結果、小西の城郭の堀の規模は戦国期よりも大きく、加藤（石垣を持つ堀）よりも小さく、おおよそ近似することが指摘されている（鶴嶋2013、表1・図12）。また、「石垣・瓦・礎石建物」に代表される織豊系城郭の三要素は後に加藤の城郭として改修された三城（宇土城・八代城・矢部城）で確認されている。

「織豊系城郭」とは「本丸を中心とした強い求心性を発揮した城郭プラン、城域の総石垣化および礎石建ち・瓦葺き建物などによる永久施設への指向、外枳形・内枳形など虎口空間をもつ特別な出入口の使用、天守などの城郭の表象性の強化などを指標とする、織田信長や豊臣秀吉とその家臣たちが築いていった一貫した系統性をもった中・近世移行期の一群の城郭を指す。」とされた（千田1987）。その後、織豊系城郭の特質として「石垣・瓦・礎石建物」の三点セットが提唱（中井1994）され、それらの要素を備えた城郭が「織豊系城郭」として認知・研究されてきた。しかし、近年の研究では必ずしもこれらの「三点セット」が揃っていないか、織豊系城郭と認めざるを得ない城郭が存在することが明らかになりつつある（下高2012）。また、九州地方は他地域に比べて織豊系城郭の導入が遅れる地域であるとして、筑前や肥前唐津は支城に織豊系城郭の技術が導入されるのは関ヶ原戦後の慶長期からであり、基本的には石垣・礎石建物・瓦の3つを全て伴うが、筑前や筑後地域ではこれら3つの全てが採用されるわけではないなど、その導入には差異が認められることも明らかとなっている（岡寺2012）。

これらのことから、小西の城郭でも支城の立地や格付けなどによって織豊系城郭の三要素の導入には差異があったと考えられ、全ての小西の城郭にこの三要素が導入されたわけではないものとする。

したがって、小西の城郭は方形を基調とした本丸を持ち、本丸を明確に区画する直線的な堀（＝戦国期の堀堀よりも大きく、石垣を持つ堀堀よりも小さい）を普請している点がその特徴として挙げられる。また、所謂織豊系城郭の三点セットとされる「石垣・瓦・礎石建物」は後に加藤の支城として改修されなかった城郭では明確に確認されておらず、当該期にこれら三点セットが導入されていたかは不明である。

以上のことから、これらの特徴を陣ノ内城にも備えていることから、陣ノ内城は小西の城郭であると考えられる。また、陣ノ内城の本丸の規模は宇土城や八代城といった小西領内の主要城郭に匹敵する規模であることから、陣ノ内城の重要性を看取することができる。

4 文献や絵図に認められる陣ノ内城 (図16)

肥後国絵図には慶長・正保・元禄・天保のいずれの国絵図も現存している。陣ノ内城は正保・元禄・天保の国絵図に記載が認められる。

正保の国絵図(正保元年(1644)～正保3年(1646))が作成された頃の肥後の情勢は、天草・島原の乱の終結から6年後で、ポルトガル船の国内への入港を禁じた第五次鎖国令(寛永16年(1639))から間もない頃である。よって、天草に隣接し、不知火海沿岸に多くの番所を抱える肥後国内も未だ緊迫した状況にあったものと考えられる。特に天草・島原の乱では一国一城令で破城になった原城が乱に利用されており、正保の国絵図には当時認識されていた肥後国内すべての城郭の記載が求められた特異な絵図であったものと評価されている。

正保の国絵図には陣ノ内城が「古城」と記載されており、当該期には陣ノ内城が公に城郭として認識されていたことを示す最古の資料として捉えることができると指摘されている。それを裏付ける史料として寛永10年(1633)の「細川忠利書状写(『三斎様江御書案文』永青文庫4.2.104)」が挙げられる。本史料には幕府巡検使がその宿泊地に陣ノ内城が存在する「土井ノ内(豊内)」を指定しており、その目的が戦国～織豊期の城郭の現状調査であることなどが記載されている。この史料には直接陣ノ内城を視察する旨の記載はないが、宿泊地に「土井ノ内(豊内)」を指定していることから、幕府も陣ノ内城について認識していた可能性も考えられる。

したがって、17世紀前半において陣ノ内城の認識は、『肥後國誌』(明和9年(1772)森本一瑞著・明治17年(1884)水島貫之増補・大正5年(1916)後藤是山改定増補)などに記載され、定説となっていた「館跡」ではなく、城郭であったものとする。陣ノ内城が「陣ノ内館跡」となったのは、渡辺玄察の著述「拾集昔語」(元禄8年(1695))以降であるものと考えられる。また、森本一瑞の著述「古城考」(天明8年(1788))が記された18世紀までは、陣ノ内城の周囲を巡る堀跡が現存していたことも確認できる。

天保の国絵図(天保6年(1835)～天保9年(1838))には「豊内古城」として正保の国絵図と同様の位置に城跡が記載されており、これも陣ノ内城を指しているものとする。



正保国絵図（赤黒文庫所蔵）より海ノ内河跡（古城）



天保国絵図（国立公文書館デジタルアーカイブHP）より海ノ内河跡（黒内古城）

図 16 正保・天保国絵図と海ノ内河跡

5 小西の支城体制と陣ノ内城の位置づけ

小西は肥後入国直後から本城の宇土城をはじめとした領国内の支城の整備を開始している。他方小西と同時に肥後国の北半分を宛がわれた加藤は隈本城を含めて在来の城郭を継承・利用して領国の統治を行っており、両者の城郭整備は対照的であった。これは、小西行長が豊臣政権の史僚大名として自国を留守にする機会が多かったことに対する秀吉の配慮と考えられている（吉村 2007）。

小西の入国は国衆一揆の鎮圧からわずか半年後である。鎮圧に伴って一揆の勢力は一掃されたとはいえ、いまだ領国内は不安定な状況であったものとする。そこで支城の整備にあたって、小西の城郭は戦国期の国人領主やその有力家臣団の領域統治の拠点城郭の近接地へ新規築城、もしくは改修を行っている特徴が認められる（表3・図17）。これらの城郭の新規築城及び改修は、旧来の統治体制から新たな統治体制への移行の象徴として行われたものとする。

表3 小西の支城整備対応表

小西の城郭	戦国期の拠点城郭	戦国期の城主名など
宇土城	宇土城（西岡台）	名和氏（国人領主）の本城
八代城	古館城	相良氏（国人領主）の肥後北上の拠点
矢部城	浜の館	阿蘇氏（国人領主）の居館
隈庄城	隈庄城	隈庄甲斐氏（豪衆）の本拠
豊福城	豊福城	名和氏・相良氏の境目での係争地
赤井城	木山城	木山氏（豪衆）の本城
陣ノ内城	松尾城	伊津野氏（豪衆）の本城

また、これらの支城の整備の際には前述の政治的な要地であるという条件に加えて、水陸交通の要衝を選定して本城である宇土城を起点として領国内を有機的に連関させるような支城網を構築したことが確認される（表4・図18）。

小西の城郭は内陸の隈庄城を除く6城（宇土城、八代城、矢部城、赤井城、豊福城、陣ノ内城）が海または河川と近接した地に立地している。小西行長は「海の司令官」とも評され（1584年日本年報『日本年報』上）、水軍・海賊の編成や兵站の輸送に長けており、陸上交通と比較して大量の物資輸送に適した海や河川を利用した水上交通網を重要視していたことが窺える。

さらに陸上交通についても、正保の国絵図からは赤井城（託麻郡との境目）を除く6城（宇土城、八代城、矢部城、隈庄城、豊福城、陣ノ内城）が本城である宇土城を起点とした経路で結ばれていたことが確認できる。この経路は小西の統治から200年以上経った後に作成された天保の国絵図でも確認されており、宇土郡、益城郡及び八代郡を結ぶ陸上交通の重要なルートであったと考える。

表4 小西の城郭の選地一覧表

選地の対象	該当城郭	備考
水上交通	（海） 八代城＝豊福城＝宇土城 （河川） 矢部城－陣ノ内城－（緑川）－赤井城	海上交通及び緑川河川交通に適した場所に築城
陸上交通	宇土城－豊福城－隈庄城－陣ノ内城－矢部城 八代城	領国を縦横に結ぶ経路上に築城
境目	八代城・矢部城・赤井城	

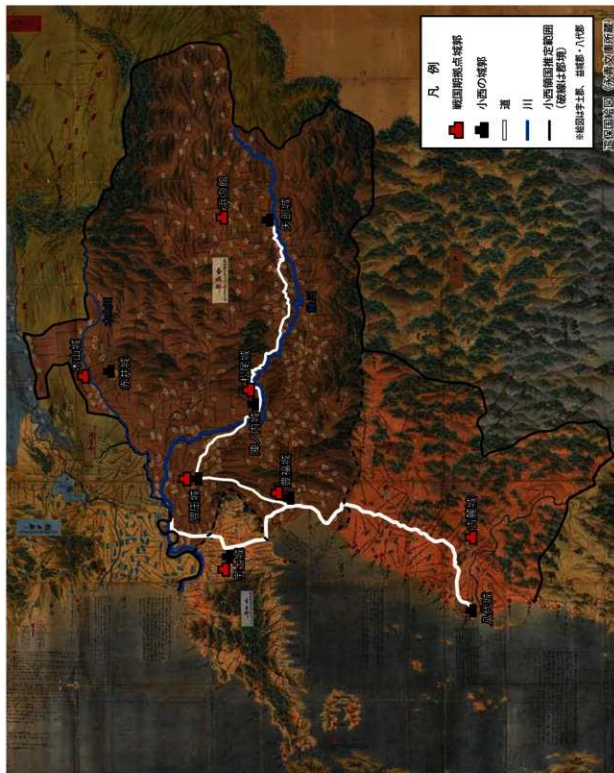


図 17 關國時の拠点城郭及び小西の城郭



図 18 小西の支城網

ここで、豊臣大名入国前の甲佐周辺の様相について概観する。中世の甲佐は一貫して阿蘇氏の所領であり、豊臣秀吉による九州平定以前は、豪衆と呼ばれる阿蘇惟豊家臣の中小在地領主の連合体の本拠地の一つであった。豪衆は益城郡の東北部一帯に勢力をもち、阿蘇外輪の裾野を領していた。これら豪衆の城郭は山稜や丘陵の末端に位置し、自然地形を巧みに利用し、切岸や堀切、堅堀などを用いた縄張りを呈している。それぞれの城郭の主郭の規模を概観すると、豪衆の中心的存在であった御船城を除いた各城郭の主郭は長径 40 m 前後、短径 20～30 m の近似した規模を呈する（表 5・図 19）。

表 5 豪衆の城郭の規模一覧表

城名	所在	立地	麓との比高 (m)	主郭		その他の遺構
				長径 (m)	短径 (m)	
津森城	益城町	山稜末端部	56	47	18	堀切・土塁
木山城 (現木山城)	益城町	丘陵末端部	25	40	28	堅堀・土塁・空堀
道上城	嘉島町	微高地	不明	不明	不明	不明
隈庄城	熊本市南区	丘陵西端	不明	不明	不明	空堀・堀切
御船城	御船町	独立丘陵地	25	143	12	土塁
早川城	甲佐町	山稜末端部	35	37	15	堀切
松尾城	甲佐町	丘陵末端部	50	42	23	
傍島馬入城	美里町	山稜	70	48	5	堀切
陣ノ内城	甲佐町	丘陵末端部	64	145	132	空堀・土塁

豪衆の城郭と小西の城郭を比較すると主郭の規模や縄張りの有り様も大きく異なる。これは従来の在地領主の領域統治や小地域統治の拠点城郭などに隣接した箇所にこれまでの肥後（地方）には見られない、直線的な塁線を縄張りとした城郭を築成し、旧来の統治体制から新たな統治体制への移行を強く意識させたものと考えられ、旧勢力の統治地域を従える際に小西がとった領国経営の手法であると考えられる。

以上のように、ここまでは小西の支城体制を政治的な要因や地理的な要因から明らかにしてきた。この支城体制の中で陣ノ内城の位置づけについて検討する。

陣ノ内城も他の小西の城郭と同様に豪衆の居城である松尾城から 200 m 北側に築城されており、旧来の拠点城郭に隣接した箇所に新規築城または大規模改修したことが指摘できる。また、陣ノ内城の立地は河川交通の面では緑川の流れが急流から緩やかになる河川交通の出発点にあり、陸上交通の面では本城の宇土城から矢部城を結ぶ経路上にあるといった領国内の水陸交通の中継地に築城されている。つまり、陣ノ内城が熊本平野と九州山地を結ぶ水陸交通及び軍事・経済の要衝に選地・築城されている点は重要である。陣ノ内城を豊内に築城することで本城の宇土城を起点とした領国を横断する河川交通及び陸上交通の中継地の統治が確立できる。その結果、緑川の下流に位置する本城の宇土城と最上流にある矢部城が水陸両面で連関することを可能とし、領国内の安定をより強固なものにすることができるものとする。また、矢部城が位置する矢部地域は九州山地を超えて領外である豊後・日向にまで連なっており、豊臣政権に連なる小西行長にとって緑川筋の統治を確立することは東九州を抑えることにもつながるものと考えられる。したがって、宇土城－矢部城を結ぶ緑川筋を抑えるために陣ノ内城を築城することは必須であったものとする。

6 陣ノ内城跡の土地利用について

陣ノ内城跡からは小西以前の中世中期における明確な遺構は確認されていない。しかし、破片ではあるが、12 世紀から 16 世紀の遺物が出土している。本遺跡の立地が比高差 64 m を測る丘陵上に所在するという地理的な特性を考慮した場合、出土遺物が他所からの流入等といった二次的な要因によってこの地に埋もれた可能性は極めて低い。したがって、陣ノ内城跡では中世から長期間にわたる土地利用がされ続けていたといえる。その利用状況は中世中期を通じて貿易陶磁器が出土していることから、一般的な集落としての土地利用ではなく、統治権力やそれに準ずる権力による利用がなされていたものと考えられる。これは当該地が水陸

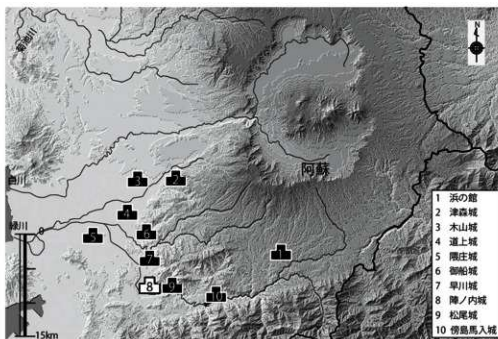
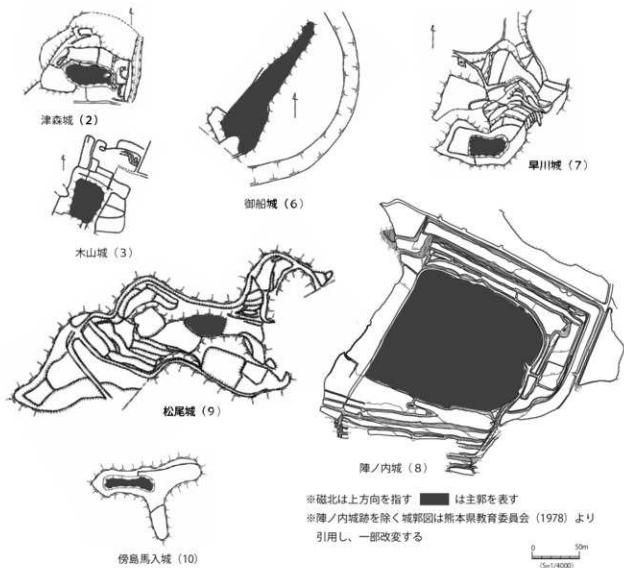


図 19 豪衆の城郭縄張り図及び分布図

交通の要衝であったこともその要因であったろう。

この土地利用は、12世紀後半に比定される同安窯系や龍泉窯系等の陶磁器の出土から、12世紀後半からと考えられる。この時期は、陣ノ内城跡から南東約1.8 kmに所在する甲佐社（阿蘇社の三末社）が近隣の領主から寄進を受けて社領を拡大していた時期に相当する。その後14世紀までの土地利用が確認されるが、中でも13世紀末から14世紀初頭に比定される高麗象嵌青磁の出土は、統治権力やそれに準ずる権力による利用を想起させ、本地における土地利用の一端を示唆している。この時期になると恵良惟澄（阿蘇大宮司惟時の娘婿）が甲佐地域及び益城郡を根拠として活動しており、その本拠とした甲佐城が陣ノ内城跡と推定されている。

15世紀になると遺物の出土量が減少することから、当該期には利用主体が他所へ移動したことが考えられる。この時期の阿蘇氏は分裂と合体を繰り返しつつ、阿蘇・益城二郡と郡浦庄を統治する戦国期の有力地域領主となっていった。

15世紀後半～16世紀前半に入ると、景徳窯窯の染付が出土するなど再び陣ノ内城跡で土地利用が認められる。この時期の甲佐は阿蘇氏家臣（家衆）が統治しており、陣ノ内城跡もその統治施設の一つとして利用されたものと考えられる。その後、天正13年（1585）の島津氏の侵攻によって「甲佐ノ圃」が落城する。

天正15年（1587）には豊臣大名の佐々成正が入国・失脚し、翌年には小西行長が入国し、陣ノ内城が築城されたが、慶長5年（1600）の関ヶ原合戦による小西の滅亡と共に廃城となったと考えられる。

その後、森本一瑞の著述「古城考」（天明8年（1788））に「・・・三四町の平地堀跡あるいは大宮司惟前の館跡也・・・」と記載があるように、少なくとも18世紀までは平坦地の四方は堀と土塁で囲まれていたことが確認できる。そして、堀底の出土遺物から19世紀以降に平坦地の南・西側で検出された堀は隣接する土塁を崩しながら埋め戻されて、陣ノ内城跡は現在の地形に近い形状になったことが確認されている。

7 破城の対象とならなかった城郭

陣ノ内城跡は18世紀には古城として認識されており、この頃まで平坦地の四方が堀と土塁によって囲まれた地形が良好に残存していたことが明らかとなっている。これは陣ノ内城跡が破城の対象とならず、破却されなかったことを示唆しているのではないだろうか。それでは何故破城の対象とならなかったのか。ここではその可能性の一つについて記載する。

陣ノ内城跡の現況や発掘調査の成果からは、陣ノ内城が本来の城として完成し、機能していたかについて疑問が残る。なお、26年度報告書では陣ノ内城が築城の途中であったために「城郭」として認識されなかった結果、当時の文献史料に登場しなかったとみることができると指摘した（甲佐町教育委員会2015）。

全国的にみて、当該期における未完の城の類例としては、神指城跡（福島県会津若松市）が挙げられる。神指城は1600年（慶長5年）に上杉景勝によって築城が行われている。この築城が「関ヶ原合戦」に関わるなどの歴史性を持ち、それと同時に築城期間が特定できるため、当時の構築方法や築城過程を考古学的に証明することができる城として知られている。城の構造は「回」字状を呈する方形二重の輪郭式の平城で、中央に本丸を置き、その外側に二の丸がある。本丸の規模は200 m×235 mのやや南北方向が長い方形で、幅57 m程の堀と土塁が廻る。堀の深さは1.3～1.6 mで堀底は平坦である。本丸の各隅付近には石垣が使用されていたと見られ、土橋も確認されている。築城の順番からは、初めに本丸の堀の掘削と土塁の構築がされ、四隅に石垣が築かれたことが明らかになっている（近藤2012）。

神指城と陣ノ内城の事例から当該期の築城の方法として、まず本丸の堀と土塁の普請から始めていることを考慮すると、陣ノ内城が本丸の堀や土塁は普請されたが、内部に礎石建物の作事や堀外に二の丸等を想起させるような遺構が認められない点は神指城と同様である。また、遺物の出土量が僅少である点も築城途中であった可能性を示唆している。さらに、陣ノ内城の南及び西側の堀は19世紀に土塁を崩して埋められたことが発掘調査によって明らかになっており、陣ノ内城が未完の城であったために、近世期に城郭として認識されず、破城の対象とならなかったことが推定される。その結果、阿蘇氏家臣の系譜を持つ渡辺玄著の

述「拾集昔語」（元禄8年（1695））では、「陣ノ内城」を阿蘇大宮司の館である「陣ノ内館」として記述していたことも考えられる。

8 陣ノ内城跡の歴史的価値

ここまで陣ノ内城が小西の城郭であることを明らかにし、小西の支城網における陣ノ内城の役割について言及した。そこで明らかになった本遺跡の歴史的価値を以下の3点にまとめる。

（1）小西の城郭の遺構を良好に残す

陣ノ内城跡には堀や土塁が現存し、その構造は「南東及び北西端に虎口を構え、2箇所を屈曲した堀を持つ城」として理解できる。この本丸を直線的かつ屈曲した堀を用いて明確に区分する城郭の構造は他の小西の城郭にも共通して認められるものである。陣ノ内城跡は主家（小西氏）が関ヶ原で滅亡した後に次代で使用・改修されず、未完の城であった可能性もあり、破却の対象にならなかったために、小西の城郭の遺構を良好に残す数少ない城郭として評価できる。

（2）豊臣大名が新たな領国を宛がわれた際の統治モデルの一つ

陣ノ内城跡とその南方200mに所在する松尾城跡との関係は、旧勢力の拠点城郭に隣接した箇所にてこれまでの肥後には見られない、直線的な塁線を縄張りとした城郭を築城するといった小西の新たな領国経営の手法の好例である。この手法は、国衆一揆が鎮圧された直後の未だ難治の国であった肥後国を宛がわれた小西行長が、旧来の統治体制から新たな統治体制への移行を強く意識させるものであった。それは行長が豊臣政権の中核に連なる大名であったことを考慮すると、陣ノ内城跡は豊臣大名が新たな領国を宛がわれた際の統治モデルの一つを明確に表す有力な事例であると評価できる。

（3）長期間にわたって統治権力やそれに準ずる権力によって利用されてきた

陣ノ内城跡の立地は甲佐岳から伸びる尾根線の先端部に広大な平端部を持つ特異な地形をもち、水陸交通の要衝であった。そのため、小西の領国経営において必須であった緑川筋の統治を確立するためにも重要であったことが理解できる。また、発掘調査の結果、中世～近世前半の貿易陶磁器が出土しており、中世の遺物群に着目すると、一般的な集落としての土地利用ではなく、統治権力やそれに準ずる権力による利用が長期間になされたことが評価できる。

主要参考文献

- 阿蘇品保夫 1999 『阿蘇社と大宮司』一の宮町史編集委員会
- 阿蘇品保夫 2005 「付論一 陣ノ内館跡・大雄寺跡・惟時位牌との関係について」『陣ノ内館跡』甲佐町教育委員会
- 池田朋生 2018 「熊本北部における中世墓終焉期の様相—阿蘇氏関連墓所の調査報告」『九州地域の中世墓終焉期を探る』第10回 中世葬送墓制研究会資料 中世葬送墓制研究会
- 稲葉綱陽 2007 「戦国期の城と地域社会」『新宇土市史 通史編第二巻中世・近世』
- 稲葉綱陽 2015 「第4章 付論 第1節 文献資料からみた陣ノ内館」『陣ノ内館跡』甲佐町教育委員会
- 大野康弘 2012 「若狭・越前における織豊系城郭の支城・与力の城、戦時の城—」『織豊城郭』第12号 織豊期城郭研究会
- 大浪和弥 2019 「加藤家肥後一國統治期における宇土城代について」『うと学研究』第40号 宇土市教育委員会
- 岡寺良 2012 「九州地方における織豊系城郭の支城—慶長～元和期における筑前・筑後・肥前地域を事例に—」『織豊城郭』第12号 織豊期城郭研究会
- 岡寺良 2012 「織豊系城郭の支城」『季刊考古学』第120号 雄山閣
- 小野正敏 1991 「城館出土の陶磁器が表現するもの」『中世の城と考古学』新人物往来社
- 上高原聡 2010 「加藤領肥後一國統治期の支城体制について—一國二城体制の考察—」『熊本史学』第92号 熊本史学会
- 菅英志 1979 『日本城郭大系第18巻 福岡・熊本・鹿児島』株式会社 創史社
- 木島孝之 2001 『城郭の縄張り構造と大名権力』九州大学出版会
- 北嶋雪山 1971 『国郡一統志』青潮社
- 後藤是山編 1971 『肥後國誌・下巻』青潮社
- 近藤真佐夫 2012 「神指城跡」『季刊考古学』第120号 雄山閣
- 下高大幅 2012 「なぜ織豊系城郭の支城、そして考えるのか—城郭遺構論の現状と課題—」『織豊城郭』第12号 織豊期城郭研究会
- 下中邦彦編 1985 『熊本県の地名』日本歴史地名大系第四四巻 株式会社平凡社
- しむす 2017 『中世阿蘇大宮司家と宝刀鎧丸』松本コロタイプ光芸社
- 鶴嶋俊彦 2000 「中世相良氏の佐敷城」『ひとよし歴史研究』第8号 人吉市教育委員会・人吉市文化財保護委員会
- 鶴嶋俊彦 2002 「寝衆考」『ひとよし歴史研究』第5号 人吉市教育委員会・人吉市文化財保護委員会
- 鶴嶋俊彦 2003 「小西行長領国の城郭」第2・26回肥後考古学会発表資料
- 鶴嶋俊彦 2005 「戦国相良氏の八代支配と城郭形成」『ひとよし歴史研究』第8号 人吉市教育委員会・人吉市文化財保護委員会
- 鶴嶋俊彦 2015 「第4章付論 第2節 陣ノ内館跡の構造・年代・築城者」『陣ノ内館跡』甲佐町教育委員会
- 千田嘉博 1987 「織豊系城郭の構造—虎口プランによる縄張編年の試み—」『史林』第70巻第2号
- 千田嘉博 2000 『織豊系城郭の形成』東京大学出版会
- 東京大学史料編纂所編 1976 『大日本近世史料 細川家史料5』東京大学出版会
- 東京大学史料編纂所編 1988 『大日本近世史料 細川家史料11』東京大学出版会
- 鳥津亮二 2010 「小西行長—「抹殺」されたキリシタン大名の実像—」八木書店
- 中井均 1994 「織豊系城郭の特質について—石垣・瓦・礎石建物—」『織豊城郭』創刊号織豊期城郭研究会
- 中井均 2012 「織豊系城郭研究の現状」『季刊考古学』第120号 雄山閣
- 早川圭 2012 「近畿地方における織豊系城郭の支城」『織豊城郭』第12号 織豊期城郭研究会
- 古城貞吉編 1967 「古城考」『肥後文献叢書』第一巻 隆文館
- 「新撰事蹟通考」『肥後文献叢書』第三巻 隆文館

- 溝口彰啓 2012「東海地方における織豊系城郭の支城-豊臣期の駿河・遠江・三河-」『織豊城郭』第12号
織豊期城郭研究会
- 森幸一郎 2010「織豊期の城郭政策—小西行長領国を対象として—」『先史学・考古学論文V 下巻 甲元眞
之先生退任記念』龍田考古会
- 吉村豊雄 2007「近世編 第一章 小西氏の政治」『新宇土市史 通史編第二卷中世・近世』
宇土市史編纂委員会 2007『新宇土市史 通史編第二卷中世・近世』
- 甲佐町史編纂委員会 2013『新甲佐町史』
- 益城町史編纂委員会 1990『益城町史』通史編
- 宇土市教育委員会 1981『宇土城跡（城山）』宇土市埋蔵文化財調査報告書第4集
- 宇土市教育委員会 2010『再検証 小西行長 第一集 謎の武将がよみがえる』
- 宇土市教育委員会 2016『再検証 小西行長 第二集 謎の武将がよみがえる』
- 宇土市教育委員会 2018『再検証 小西行長 第三集 謎の武将がよみがえる』
- 菊鹿町教育委員会 2001『熊本県の主要城跡』菊鹿町文化財調査報告第8集
- 熊本県教育委員会 1977『浜の館』熊本県文化財調査報告第21集
- 熊本県教育委員会 1978『熊本県の中世城跡』熊本県文化財調査報告第30集
- 熊本県教育委員会 1998『二本木前遺跡』熊本県文化財調査報告第167集
- 熊本県教育委員会 2000『祇園遺跡』熊本県文化財調査報告第188集
- 熊本県教育委員会 2003『熊本県の主要城跡—追加資料』
- 甲佐町教育委員会 2005『陣ノ内館跡』甲佐町文化財調査報告
- 甲佐町教育委員会 2015『陣ノ内館跡』甲佐町文化財調査報告第3集
- 南関町教育委員会 2013『南関城跡（鷹ノ原城跡）V』南関町文化財調査報告第13集
- 益城町教育委員会 2019『益城町文化財調査年報1』
- 水俣市教育委員会 2015『水俣城跡—確認調査報告書—』水俣市文化財調査報告書第5集
- 八代市教育委員会 2006『麦島城跡—都市計画道路建設に伴う発掘調査—』八代市文化財調査報告書第30集
- 八代市教育委員会 2013『八代城郭郡—古麓城跡、麦島城跡、八代城跡、松浜軒、平山瓦窯跡—』八代市文
化財調査報告書第45集
- 山都町教育委員会 2012『矢部城（愛藤寺城）測量調査報告書』山都町文化財調査報告書第3集

報告書抄録

ふりがな	じんのうちじょうあと そうかつほうこくしょ
書名	陣ノ内城跡 - 総括報告書 -
副書名	
シリーズ名	甲佐町文化財調査報告
シリーズ番号	第5集
編著者名	上高原 聡
編集機関	熊本県甲佐町教育委員会
所在地	〒861-4696 熊本県上益城郡甲佐町大字豊内719番地4
発行年月日	2020年(令和2年)12月25日
資料の保管場所	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
じんのうちじょうあと 陣ノ内城跡	くまもとけんかみましきくんこうさまちおおおざとようちあざじんのうち ほか 熊本県上益城郡 甲佐町大字豊内 字陣ノ内 他	444	016	323859	1304859	平成14年 10月～令 和2年9月	1,152㎡	確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺物
陣ノ内城跡	城郭	中世・近世	出土遺物は縄文時代～近現代まで数時代にわたる。中でも本遺跡の性格を踏まえると、中・近世の遺物が主なものとなる。以下、4期に大別した主な遺物を記載する。 Ⅰ期：12～14世紀を主体とした遺物群。同安窯・龍泉窯青磁、華南産白磁、高麗象嵌青磁、東播系須恵器など Ⅱ期：16世紀前半～後半の遺物群。景徳鎮窯の染付など Ⅲ期：16世紀末～17世紀前半の遺物群。潮州窯の染付など Ⅳ期：19世紀以降の遺物群。肥前系陶磁器など

要 約	<p>本報告書は平成14年～令和元年にかけて実施された甲佐町指定文化財「陣ノ内館跡」の発掘調査をはじめとした諸調査の成果をまとめた総括報告書である。</p> <p>陣ノ内城跡は、豊臣大名である小西行長の支城として位置づけられる城郭であり、現在でも遺跡の中心に約1.9haの方形の平坦部を持ち、その周囲を囲む約400mの堀と土壁が良好に残存している。発掘調査の結果、その構造は「南東及び北西端に虎口を構え、2か所の屈曲した堀を持つ城」として理解でき、小西の城郭の遺構を良好に残す数少ない城郭である。</p> <p>また、陣ノ内城跡とその南方200mに所在する松尾城跡(甲佐町指定文化財)との関係は、旧来の拠点城郭に隣接した箇所にこれまでの肥後国には認められない直線的な塁線を縄張とした城郭を築城することで、新たな統治体制への移行を強く意識させたものであった。これは国衆一揆鎮圧直後の難治の国であった肥後国を宛がわれた小西行長がもった領国経営の手法を明瞭に残しており、豊臣大名が新たな領国を宛がわれた際の支配モデルの一つとして有力な事例である。</p> <p>最後に、陣ノ内城跡の立地は緑川筋中流域の水陸交通の要衝であったために、中世から常に統治権力やそれに準ずる権力によって土地利用されていた。それは小西の領国経営において必須であった緑川筋の支配を確立するためににも重要であった。</p>
-----	---

2020年12月25日 印刷

2020年12月25日 発行

甲佐町文化材調査報告第5集

陣ノ内城跡

- 総括報告書 -

著作権所有 熊本県上益城郡甲佐町大字豊内719-4

発行者 熊本県甲佐町教育委員会

印刷者 社会福祉法人 熊本県コロニ一協会

(コロニ一印刷)

熊本県熊本市西区二本木3丁目12-37

